

第4章 発掘調査

第1節 発掘調査の方法

表土を重機（バックホー）で除去し、遺構遺物を包含している黒色土を人力により掘削した。紫ゴラの堆積確認や、遺物出土、遺構状の土色変化が認められた場合は、写真記録などを行いつつ池田降下軽石面を最終目標として調査を実施した。判断材料が不足する場合、トレンチの拡張やサブトレンチの設定を行った。

第2節 基本層序

いずれの調査地点も同様の層序がみられた。II層である黒色土は質的にはほぼ差がみられないが、パミスの種類・色により分類した。原則としてIII層の池田降下軽石面までの掘り下げにとどめており、一部の地下式横穴墓竪坑において下層の確認を行った。

| 層名 | 特徴・色調 | 備考 |
|-----|---------|----------|
| I | 表土 | 耕作土 |
| IIa | 黒色土 | 赤色パミスを含む |
| IIb | 黒色土 | 白色パミスを含む |
| IIc | 黒色土 | パミスを含まない |
| III | 池田降下軽石層 | |
| IV | アカホヤ火山灰 | |
| V | 黄褐色砂質土 | |
| VI | 黒褐色粘土 | (チョコ層) |

第3節 調査年度ごとの概況

令和元年度から5年度までの5年にわたる調査により、岡崎古墳群の内容についていくつか新しい知見を得ることができた。一方では新たな疑問点が浮かび上がり、今後も調査や検討を重ねる必要がある。

各年度における調査目的は以下のとおりである。

令和元年度・2年度は適宜鹿児島県と協議したもの、令和3年度以降については、検討委員会での指導助言を受けたものとなっている。

令和元年度・2年度

遺跡の広がりについての確認

令和3年度

無古墳地帯での消失墳の再発見

令和4年度

墳丘規模確認（5号墳）

古墳の真否確認（10～14号墳）

令和5年度

令和元年度調査地点における遺構種類
規模・内容確認

調査内容

令和元年度・2年度は、4号墳周辺で調査を実施（第5図 令和元年度調査区平面図、第10図 令和2年度調査区平面図）。表土を除去し、遺構と思われる土色変化を複数確認した。土色変化は環状にみられる部分、地下式横穴墓の竪坑にみられるアカホヤ火山灰や黒色土の混じった部分を確認した。遺構種類、規模の確認には至っていない。

また、高坏などがまとまって出土するなどした（第5図）。

令和3年度は、かつて塚が存在したとされるが、現状では確認できなくなっているエリアについてトレンチによる古墳周溝再発見を試み、T1～T11、T5-2を設定した（第14図 令和3年度トレンチ配置図）。既往調査から、周溝内には開聞岳を起源とする紫ゴラ（874年）の堆積が見られることが知られており、鍵層として確認を進めた。結果、古墳周溝は確認されなかったが、地下式横穴墓が多数確認された。地下式横穴墓が確認されたトレンチはT5、T3、T6、T9で合計12基（第2表 令和3～5年度地下式横穴墓）だが、土器が集中して見つかった23号（T3-7）、19号（T9-1）は、竪坑本体の確認はできていない。地下式横穴墓が確認されなかったトレンチも、T11が攪乱により破壊されているのを除き、土層に不整合はみられなかった。

複数のトレンチで紫ゴラの堆積が認められた（T3、T6）ため、トレンチの拡張等により遺構確認を試みたが、古墳周溝ではなく地下式横穴墓玄室の陥没部分への堆積（14、19号地下式横穴墓）であったことが判明した。このことから、地下式横穴墓築造後、ある程度早い段階で崩落したものがあることが分かる。また、竪坑部以外にも溝状

に豎坑埋土が確認できた場所がある。豎坑の埋め戻し残土か、豎坑埋め戻し土の流出が考えられる。いずれにせよ、豎坑周辺にわずかな溝状のくぼみがあることで、地下式横穴墓のための小さい盛土の存在が想起される。

遺物は、23号地下式横穴墓（T3-7）でまとまって見つかった（第15図 21号、23号地下式横穴墓遺物出土状況）。出土層は地下式横穴墓豎坑埋土状の土層上面である。豎坑埋土状土層を池田降下軽石面まで掘り下げたが、豎坑本体は確認されなかった。地下式横穴墓本体に限りなく近いと判断し、地下式横穴墓が存在するとした。また、14号（T3-6）から、崩落した玄室の上に落ち込んだと考えられる須恵器が出土した（第16図 14号～18号地下式横穴墓及び遺物出土状況（47～50））。

令和4年度は、令和3年度に古墳の再発見に至らなかったことを受け、現存する塚の規模確認、真否確認のため5号墳（第24図 令和4年度トレンチ配置図及び地下式横穴墓豎坑（5号墳周辺）、10号～14号墳（第25図 令和4年度トレンチ配置図（10号～14号墳））について調査を実施した。当年も周溝内に堆積する紫ゴラの鍵層として、周溝の有無、規模の確認を試みた。

令和5年度は、令和元年度調査地点の再調査による遺構種類、規模の確認、周辺地点での状況把握調査を行った（第29図 令和5年度トレンチ配置図（R1と合成））。再調査の結果、周溝、地下式横穴墓が確認できた。T1では表土が10cmほどあり、直下で紫ゴラの堆積を確認し、南側に隣接する元年度調査区が大きく削平を受けていることも判明した。

第4節 遺構と遺物

第1項 古墳周溝

令和元年度調査において確認した環状を呈する遺構状の土色変化地点の一部を、令和5年度に再調査した。令和元年度調査最終面で土色変化を確認したため、変化地点を切るイモ穴等の攪乱の掘削による土層観察と、サブトレンチによる池田降下軽石面までの掘削と土層観察により、遺構種類、規模の確認を試みた。また、無遺構とされた部分についても再確認を行い、2基の円墳を復元した（第29図、第31図 21号、22号墳復元図（推定））。令和5年度T5の東部端では、令和元年調査時に確認された土色変化について、平面及び土層断面からも確認することができなかったため、今回は古墳であるとの判断は控える。

1 21号墳

令和5年度T1、T4、T6で周溝が確認できた。復元した直径は検出した周溝の外側で約14m、内側で約12mを測る。T1はT4、T6の面より一段高く、表土が約10cmで黒色土の残りがよく、表土直下の検出面で紫ゴラの堆積が明瞭に確認できた。南側に位置する令和元年度調査区は現状で50cm低くなっており、後世に削平され、紫ゴラの堆積がみられる部分は削平されていることが判明した。また、池田降下軽石面での旧地形の復元では、北から南方向への比較的急な傾斜があり、古墳時代もやや低い土地であったことが推測され、黒色土が厚く堆積したため周溝基底部が池田降下軽石面まで至っていない。

あわせて、少なくとも3基の地下式横穴墓が周溝内に構築されている。T6で確認した周溝内からは地下式横穴墓豎坑埋土様の埋土が確認され、未調査部分方向への落ち込みを確認しており、地下式横穴墓豎坑の存在を想起させる。本例を加えると、少なくとも4基の地下式横穴墓が構築されたことになる。

2 22号墳

令和5年度T5、T6で周溝を確認できた。調査面積が不足しており、精度は低いが復元直径は周溝の外側で約13m、内側で約10mを測る。T6での周溝の想定は、令和元年度調査で祭祀に伴う

と考えられる土器がまとまって出土した地点の土層断面の観察を再度行い、周溝内であると判断したこととあわせたものである。周溝内には最低2基の地下式横穴墓が築造されている。

第2項 地下式横穴墓

5年にわたる調査の結果、岡崎古墳群内での地下式横穴墓の総数は35基（伝承地、北田ノ上古墳群を含む）となった。新発見した地下式横穴墓のほとんどは竪坑の検出にとどめ、一部の竪坑について玄室方向の確認などを行った。

番号については、後述の中間まとめにおいて付与した番号を用いるが、調査時の番号も併記する。（第32図 古墳及び地下式横穴墓分布図・第6表 地下式横穴墓一覧）

1 竪坑規模

0.6 m × 0.5 m程度の小型のものから、2 mを超える大型のものまでを確認した。どちらの規模も、周溝利用、単独構築の両方で見られる。

2 埋土

竪坑は当時の地表面である黒色土から掘り込み、池田降下軽石、アカホヤ火山灰を掘りぬいて構築される例がほとんどであるため、黒色土にアカホヤ火山灰等が混ざった埋土をもつ。しかし、検出面が黒色土となっているもの（12号地下式横穴墓）があり、黒色土をより分けて使った可能性がある。

埋土中に赤色粒がみられる例（12号地下式横穴墓）がある。18号墳2号、3号地下式横穴墓でも同様の例が確認されている。

3 周辺

竪坑周辺には竪坑埋土の残土、あるいは流土と考えられる溝状またはシミ状の広がりが見られる場合がある（23号地下式横穴墓、8号地下式横穴墓）。この土は竪坑本体に近づくほど厚くなる傾向が見られるが、遺構として形状を捉えることが困難である。また、竪坑直上ではなく、残土部分での祭祀が想定される遺物の出土がある（12号、23号地下式横穴墓）。

4 閉塞部材

玄室方向の確認のため、竪坑の一部掘削を行った。閉塞部材として考えられるアカホヤ土塊の確認ができること、竪坑壁面が下部まで続くことを指標とした。

7号、21号地下式横穴墓では、アカホヤ土塊が確認できたが、閉塞状態での検出ではない。

21号墳の周溝内に構築された11号地下式横穴墓は竪坑の平面規模1.14 m × 0.68 mを測る、隅丸方形を基調とする岡崎古墳群内でも小型の部類に入るものである。閉塞部材として下部にはアカホヤ土塊を用いているが、上部には軽石製組合式石棺の蓋部分を流用あるいは転用して用いていた。玄室内の様子をうかがうことができなかったため、玄室内にも石棺があるのかは不明だが、竪坑規模からは玄室内に石棺が持ち込まれているとは考えにくい。執筆段階では類例の発見はできておらず、今後も類例調査を含め検討を要する。

第3項 遺物

遺物は調査年ごとに掲載する。

1 令和元年度調査出土遺物

1は小型丸底壺である。口縁端部が平坦に成形されている。器面に赤色顔料が塗布されており、器面調整は内外面ともにミガキを行っている。胴部中央には、焼成後穿孔が施されている。2は罎と呼ばれる非常に小さな壺である。頸部のみ赤色顔料が確認できる。3は壺の底部である。胴部が張り出し、頸部へ向かってすぼまる形をしており、底部は厚く、内面中心部が飛び出している。

4～9は壺である。4はややいびつな形をしており、口縁部外面のみ内傾し稜をもつ部分が見られる。5は口縁部が直行し、底部に厚みがある。6は口縁端部がやや外反する。丸みのある形で、器壁が口縁部から底部まで均一である。7は口縁端部が内傾する。8は口縁部が直行する。器壁は均一で、底面は平坦である。9は器形に丸みをもつ。

10～26は高坏である。10は坏部が屈曲し外反しながら大きく開き、脚部は裾部が屈曲してやや丸みを帯びて広がる。11は坏部にゆるやかな

| 番号 | 年度 | トレンチ | トレンチ 内番号 | 竪坑 | | | 玄室 | | 備考 |
|----|-----|-------|-------------|------|------|------|------|----|-------------|
| | | | | 長辺 | 短辺 | 平面積 | 向き確認 | 崩落 | |
| 7 | R04 | M5_05 | 1 | 2.10 | 1.60 | 3.36 | ● | | |
| 8 | R04 | M5_06 | 1 | 1.85 | 0.46 | 0.85 | ● | | |
| 9 | R05 | T1 | 1 | 1.46 | 1.42 | 2.07 | ● | | 短辺推定値 |
| 10 | R05 | T4 | 1 | 1.72 | | | - | | |
| 11 | R05 | T4 | 2 | 1.14 | 0.60 | 0.77 | ● | | |
| 12 | R05 | T6 | 1 | 2.00 | 1.89 | 3.78 | ● | | |
| 13 | R05 | T5 | 1 | 1.78 | | | ● | | |
| 14 | R03 | T3 | 6 | - | - | - | ● | ● | 約半分 |
| 15 | R03 | T3 | 1 | 2.16 | 2.03 | 4.39 | - | - | |
| 16 | R03 | T3 | 2 | 1.32 | 0.73 | 0.97 | - | - | |
| 17 | R03 | T3 | 5 | 1.72 | 1.68 | 2.89 | ● | ● | |
| 18 | R03 | T3 | 3 | 1.44 | 0.94 | 1.35 | ● | ● | |
| 19 | R03 | T9 | 1 | - | 1.38 | | - | - | |
| 20 | R03 | T9 | 2 | - | - | - | - | ● | シミの広がりのみ |
| 21 | R03 | T3 | 4 | 1.36 | 0.77 | 1.04 | - | - | |
| 22 | R03 | T6 | 1 | 0.60 | 0.50 | 0.30 | ● | ● | 両辺ともに最低値 |
| 23 | R03 | T3 | 7 | - | - | - | - | - | 弱いシミのみ、土器集中 |
| 24 | R03 | T5 | 1 | 2.47 | 2.26 | 5.58 | ● | - | |
| 25 | R03 | T5 | 2 | - | - | - | - | ● | |

第2表 令和3～5年度地下式横穴墓

稜をもつ。脚部は屈曲して広がる。12.14.15は、
 坏部に明確な稜をもち外反しながら開き、脚部は
 ゆるやかに屈曲して広がる。13は坏部に明確な
 稜をもち、外反しながら開く。脚部はラッパ状
 に開く。16～18は、坏部に明確な稜をもち外
 反しながら開き、脚部はゆるやかに広がる。19
 ～22は高坏の坏部である。明確な稜をもち、外

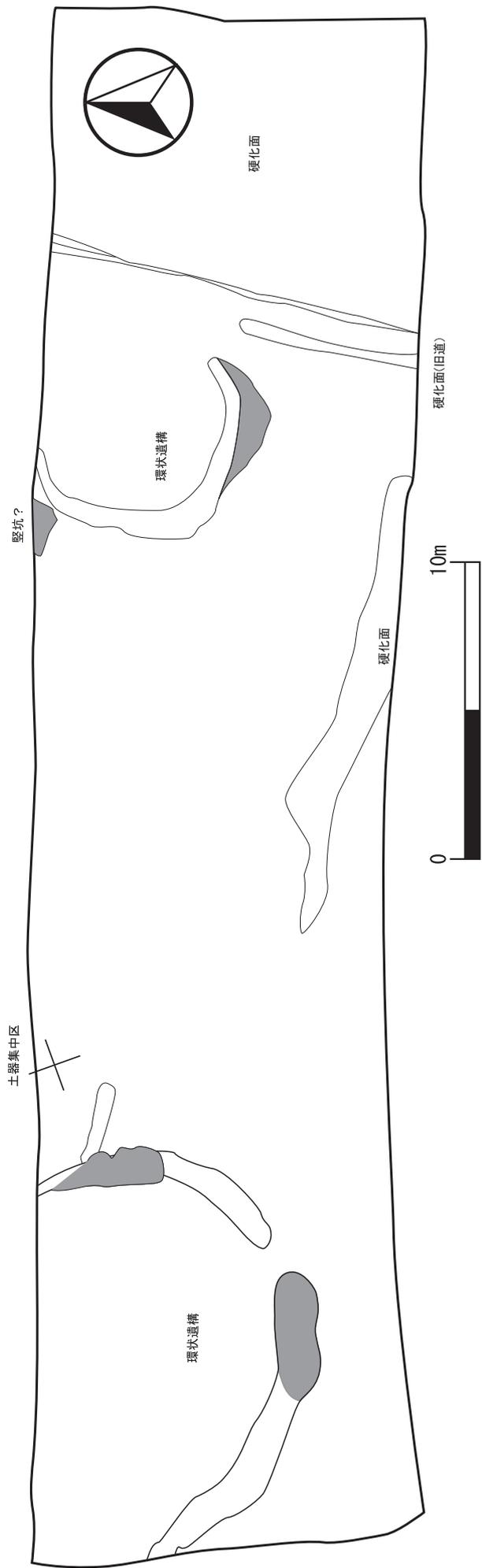
反しながら開く。23～26は高坏の脚部である。
 裾部の形状は、23はゆるやかに、24はラッパ状
 に、25・26は屈曲して開く。

2 令和2年度調査出土遺物

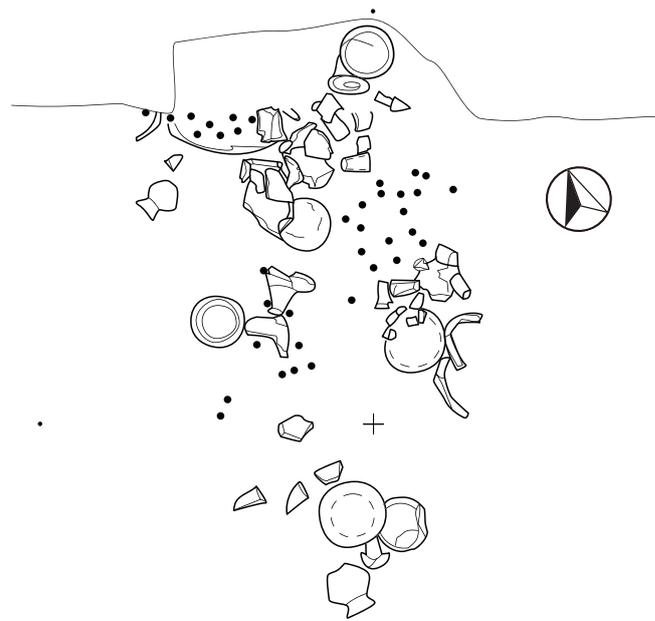
27・28は甕の胴部である。頸部は直行し、胴
 部がゆるやかに張り出す。器壁は比較的薄手で、

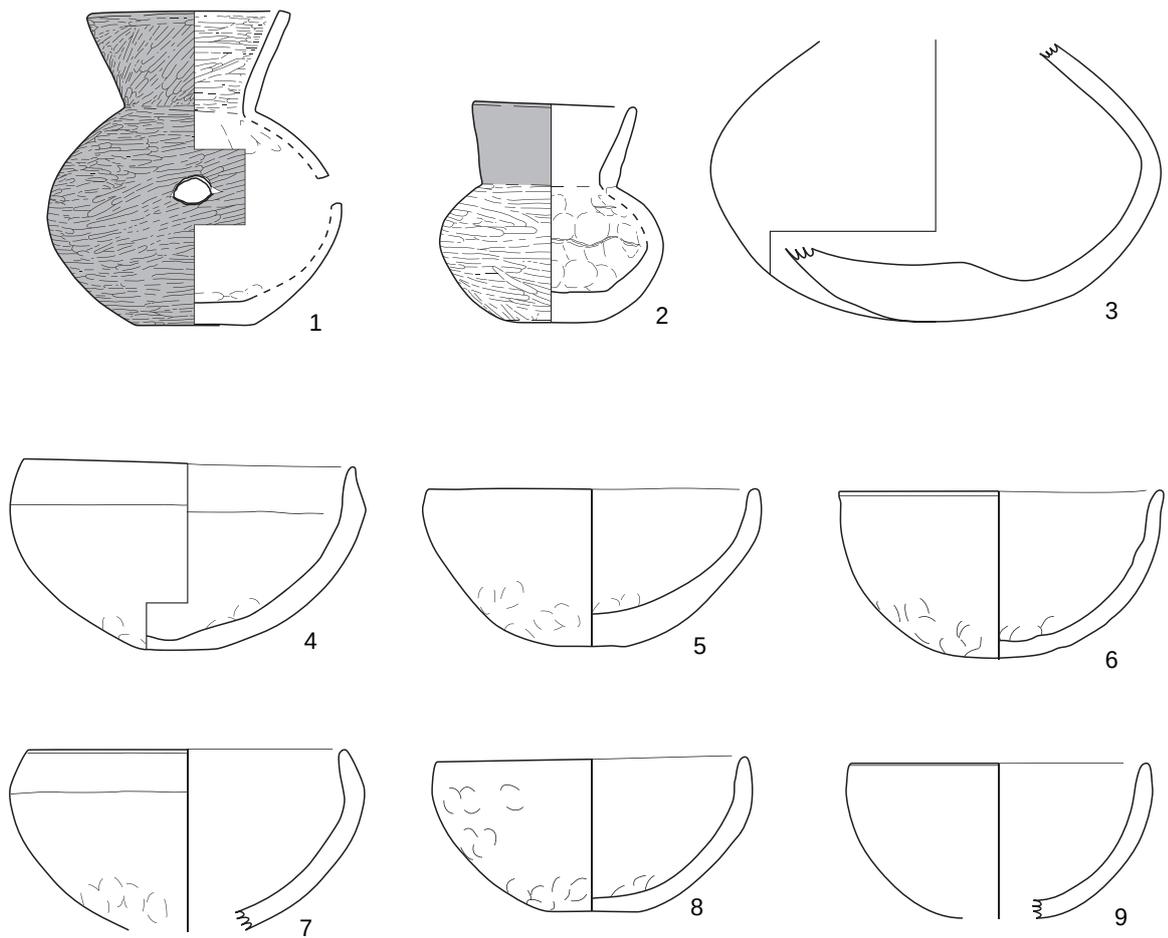


第4図 令和以降トレンチ位置図

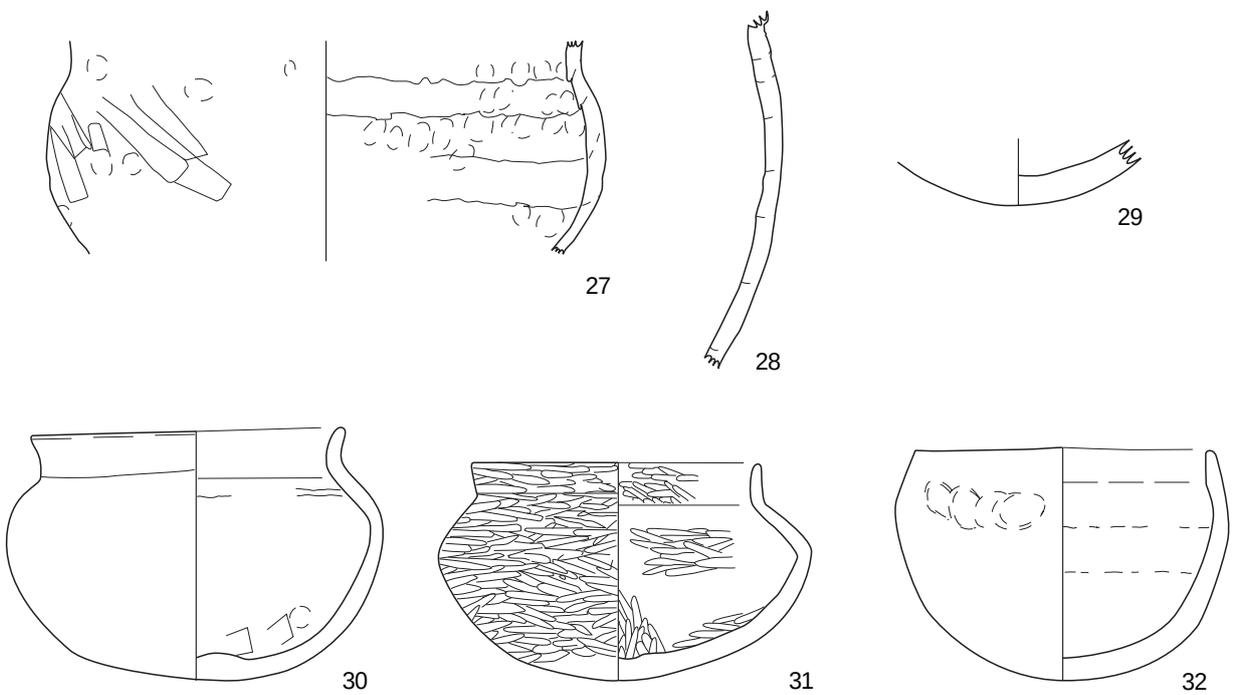


第5図 令和元年度調査区平面図

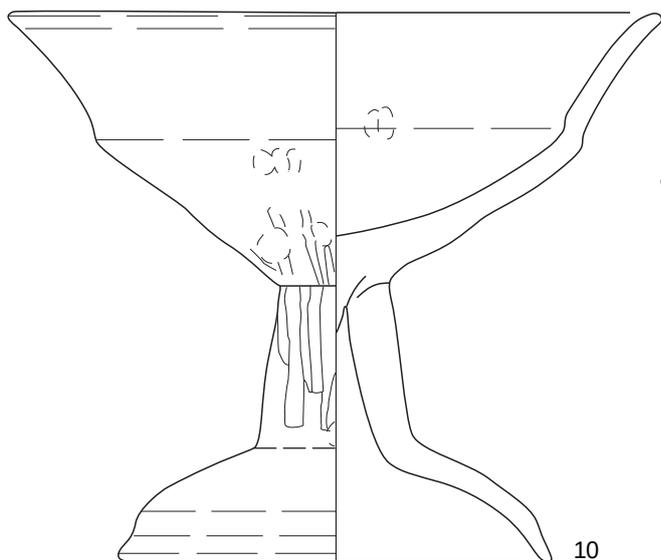




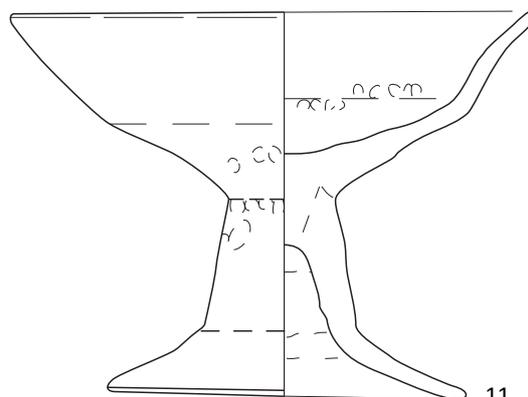
第6図 出土遺物(1)



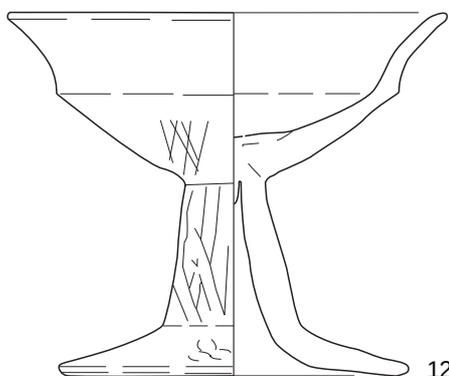
第7図 出土遺物(4)



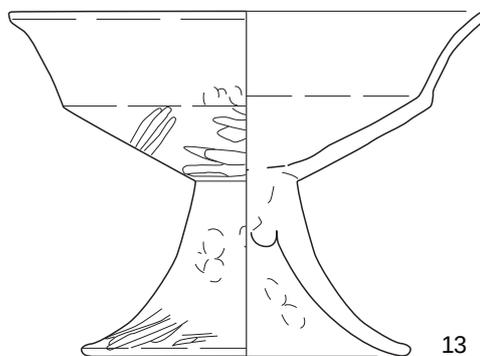
10



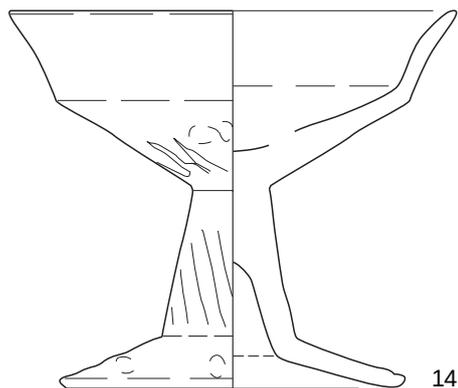
11



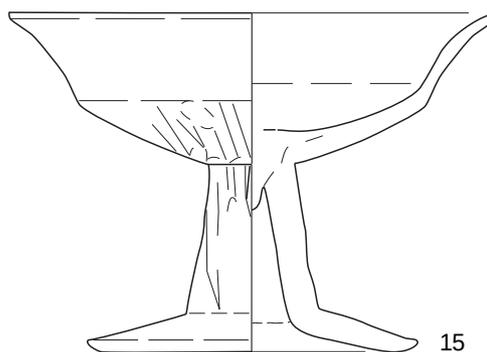
12



13



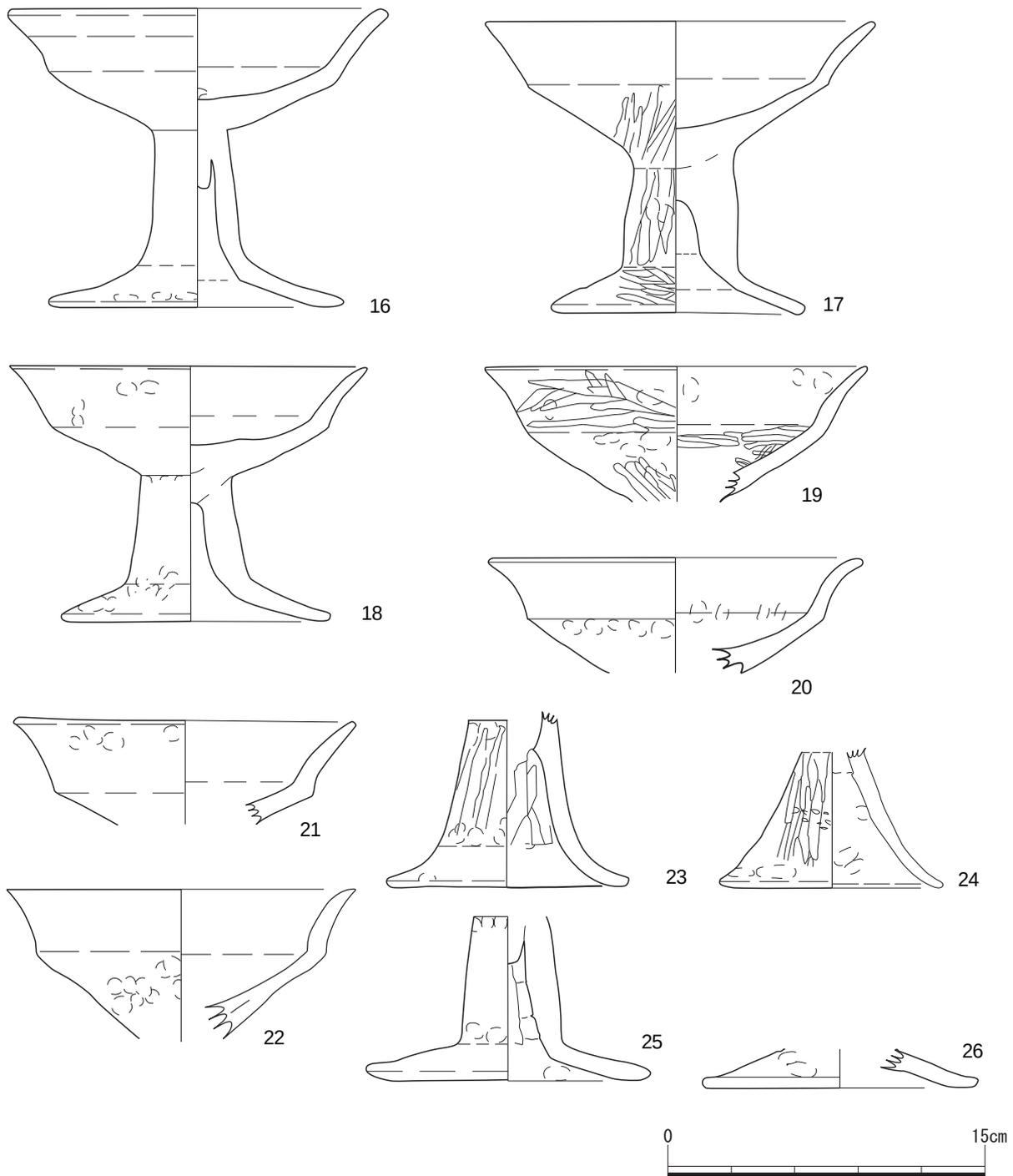
14



15



第8図 出土遺物(2)



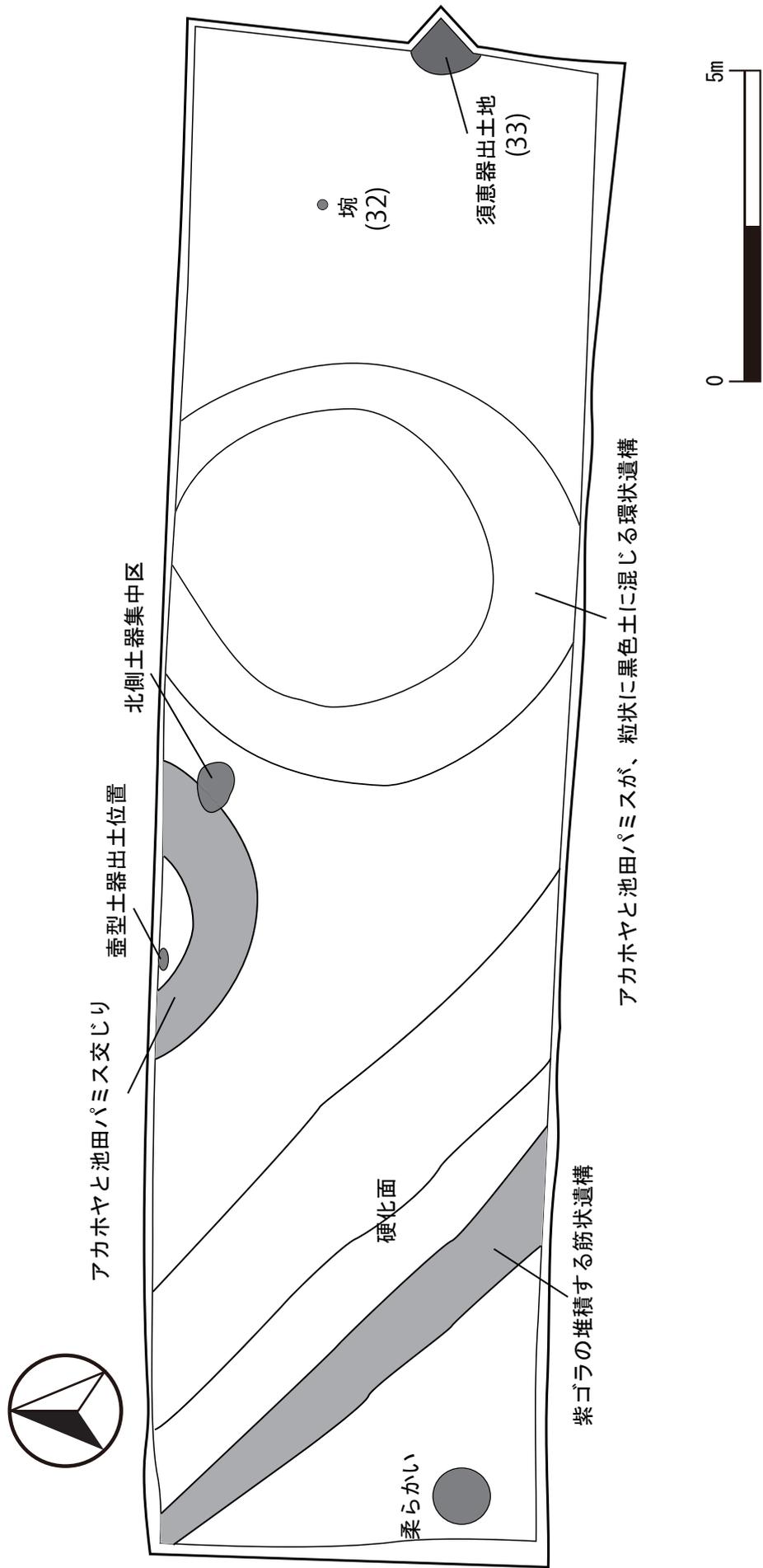
第9図 出土遺物(3)

内面には粘土継ぎ痕が明瞭にみられる。27 同様に器壁は比較的薄く、粘土継ぎ痕がみられる。29は壺の底部である。

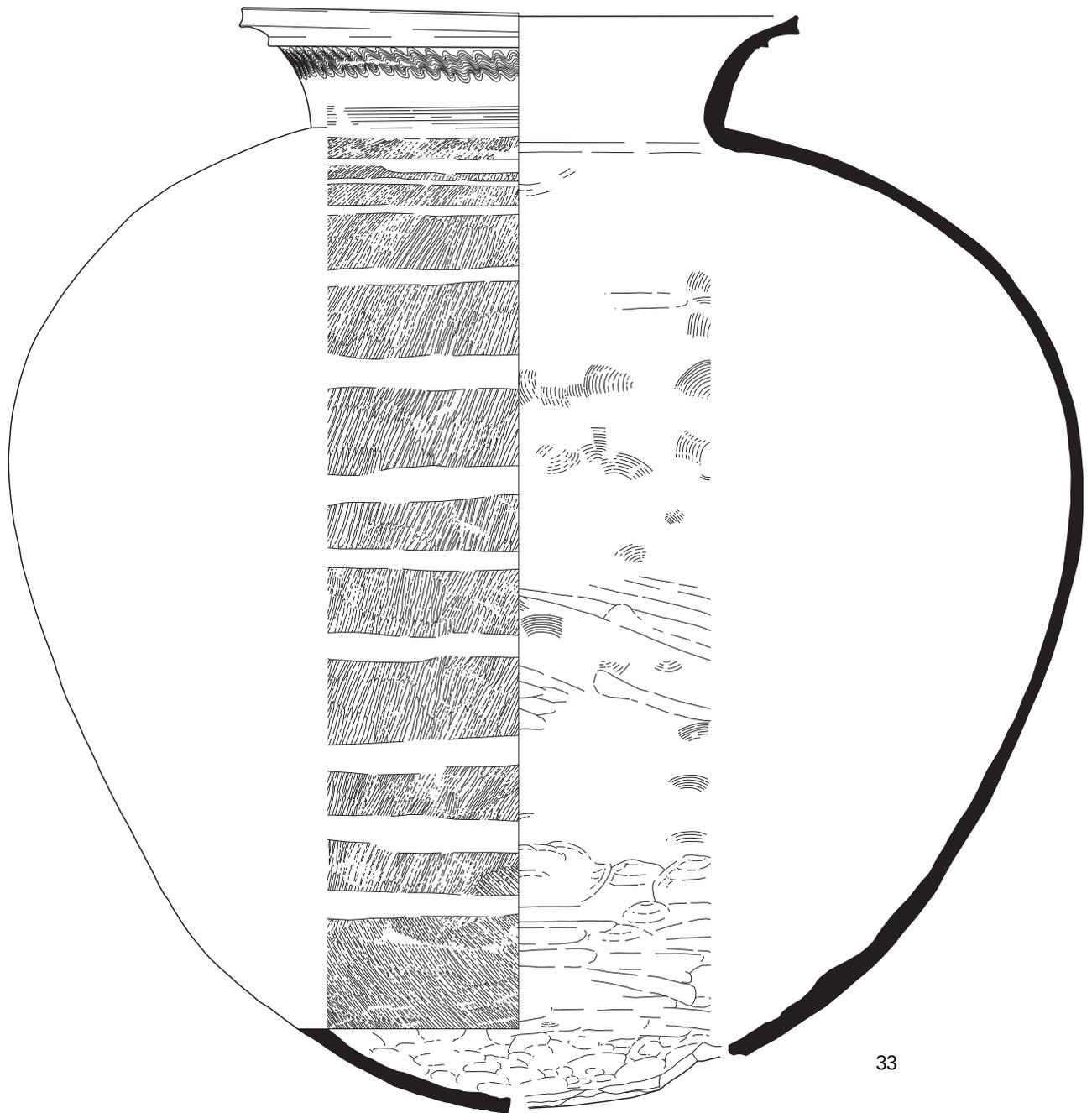
30・31は浅い壺である。30は口縁部がやや外反し、胴部は丸みを帯びて張り出す。底部内面の中央付近がやや盛り上がっている。31は口縁部が直行し、胴部はそろばん玉状に張り出す。器面調整は内外面ともにミガキを行っている。

32は壺である。口縁部内面が胴部にかけてえぐれるようにゆるやかに屈曲する。

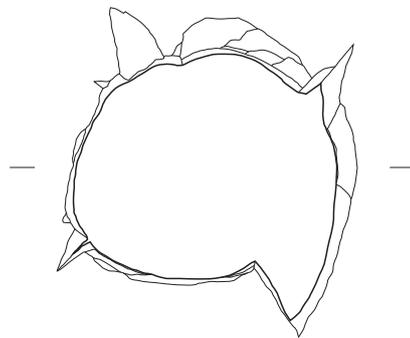
33・34は須恵器の甕で、底部穿孔が施されている。33は口縁端部とその直下に三角形の突帯を巡らせ、さらに櫛描波状文を施す。胴部外面には平行タタキがみられ、重なる部分は指でナデ消している。内面はタタキ目を丁寧にナデ消している。34は口縁端部が丸みをもって張り出し、その直下に三角形の突帯を巡らせる。胴部外面には格子目タタキがみられ、内面はタタキ目をナデ消しているものの青海波文が残る。



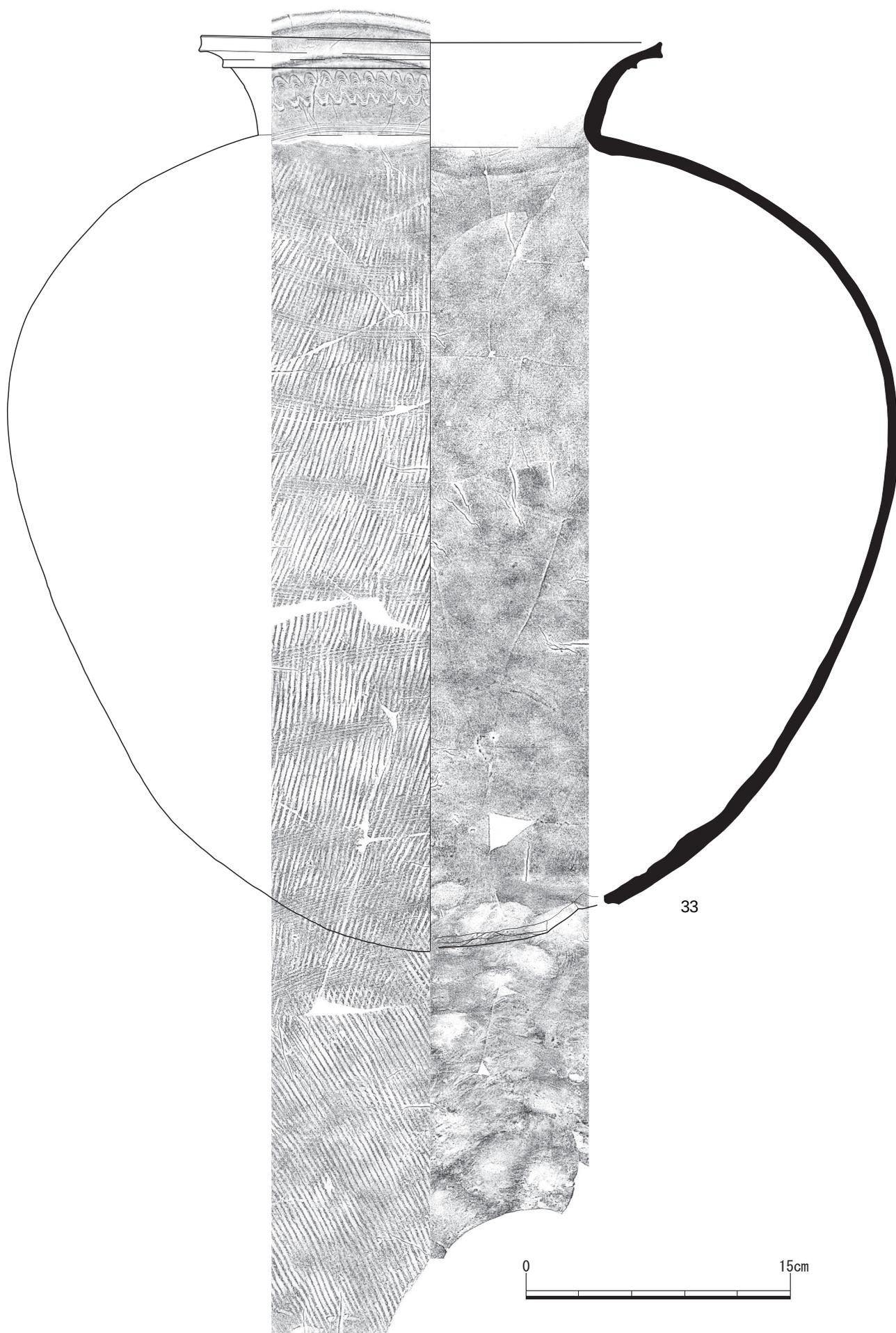
第10図 令和2年度調査区平面図



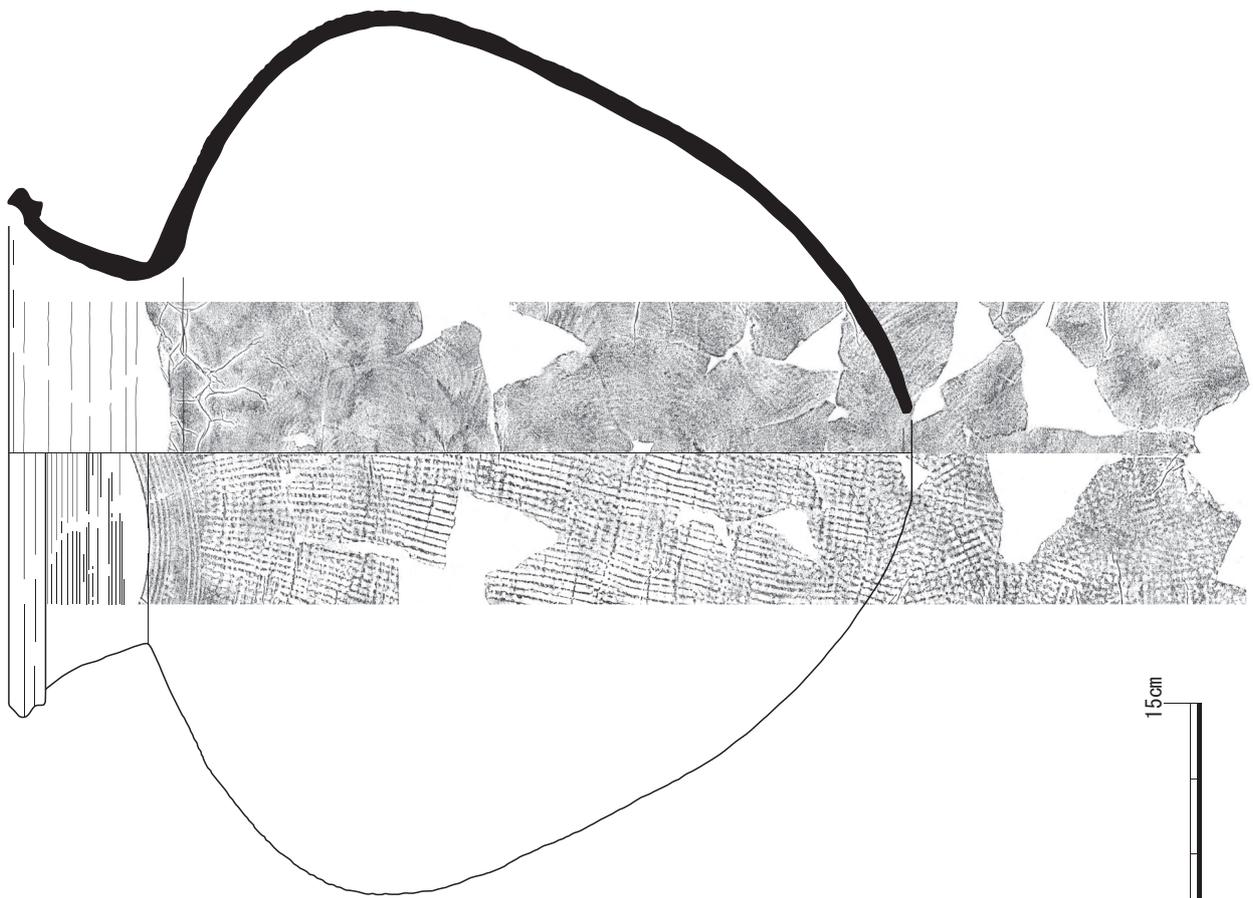
33



第 11 図 出土遺物 (5)



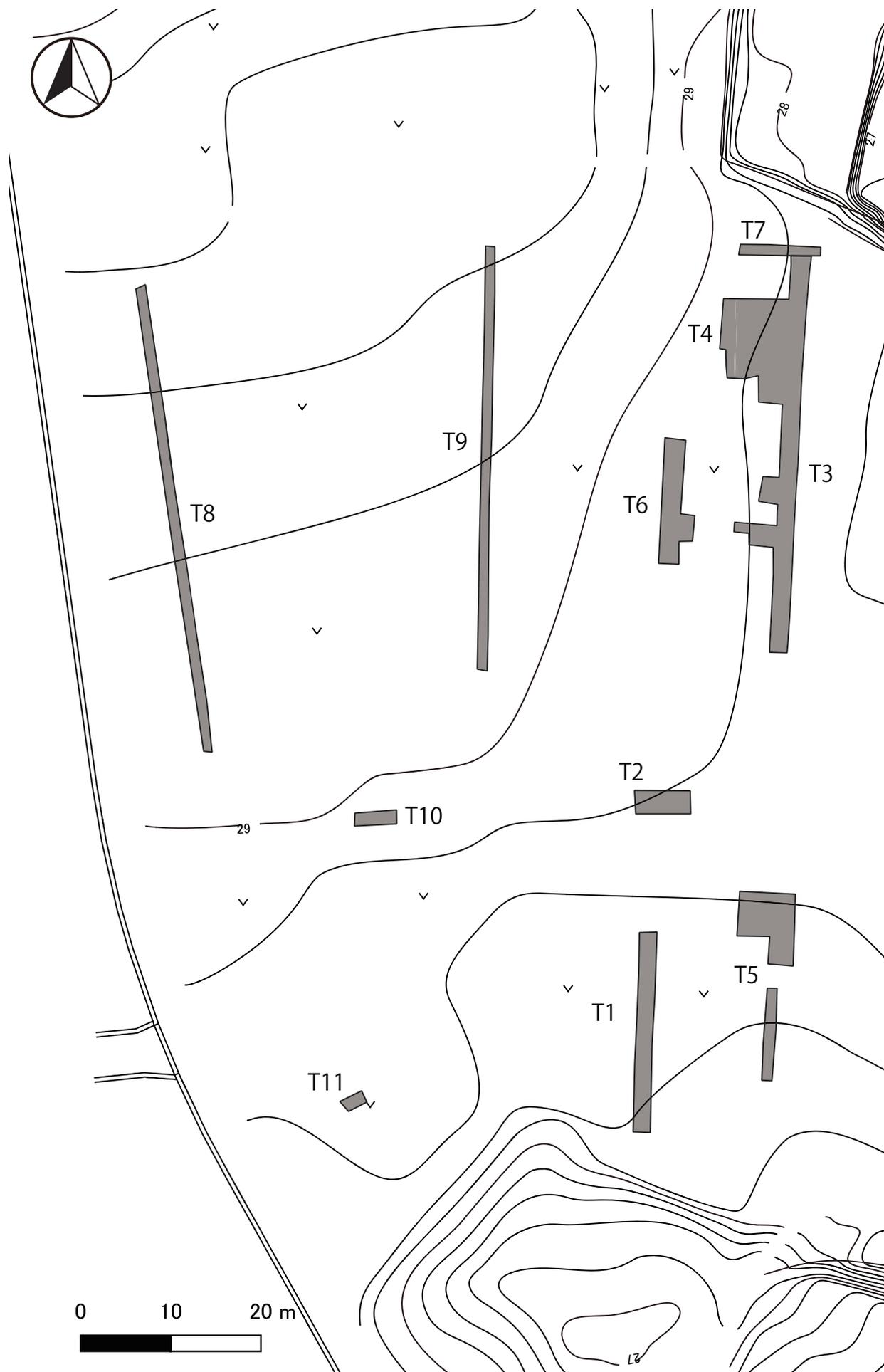
第 12 図 出土遺物 (6)



34



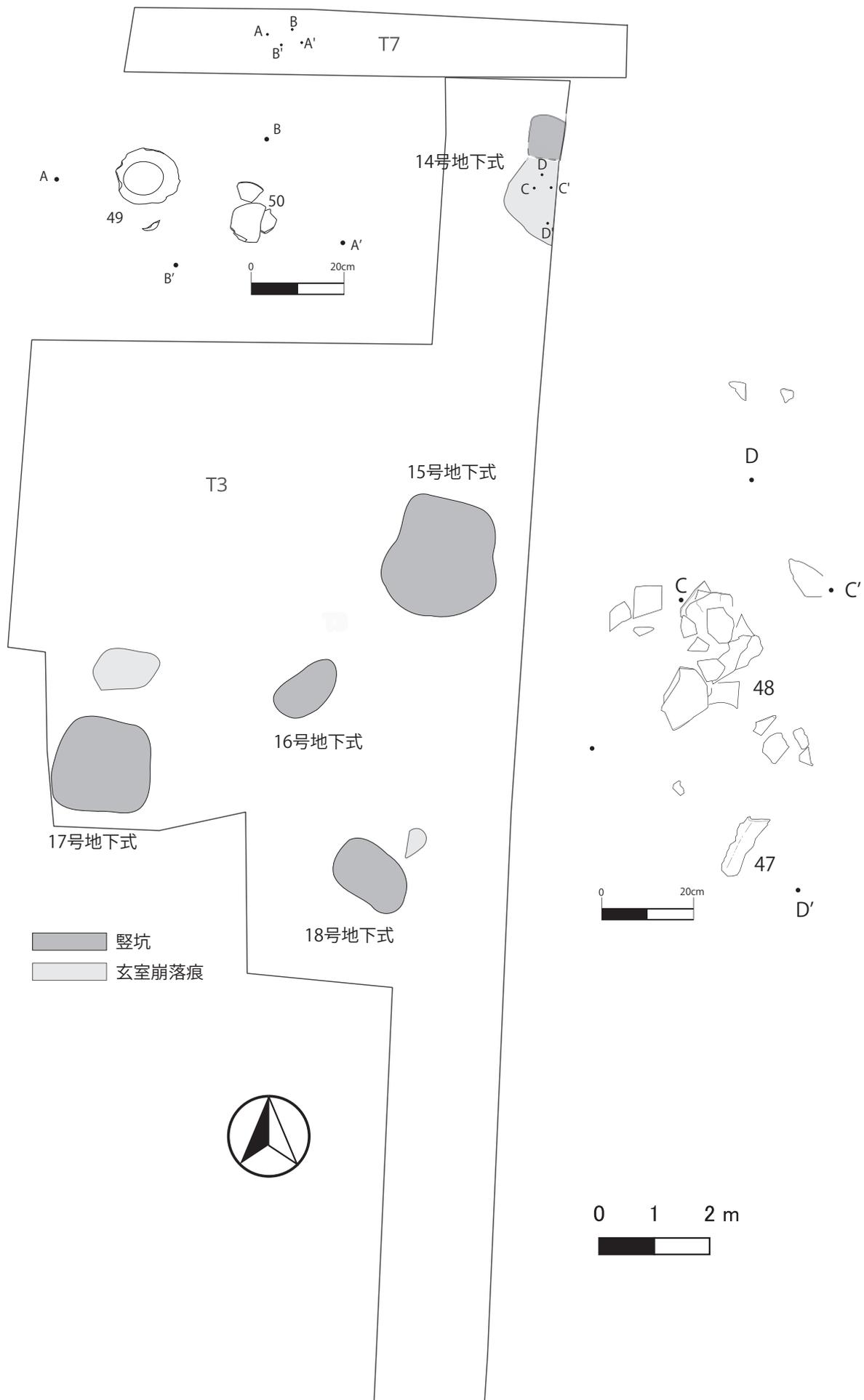
第 13 図 出土遺物 (7)



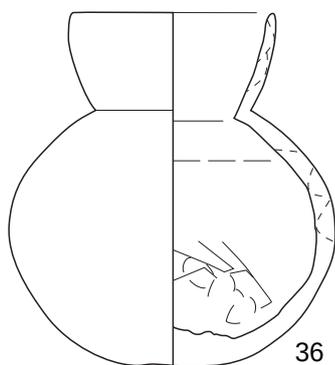
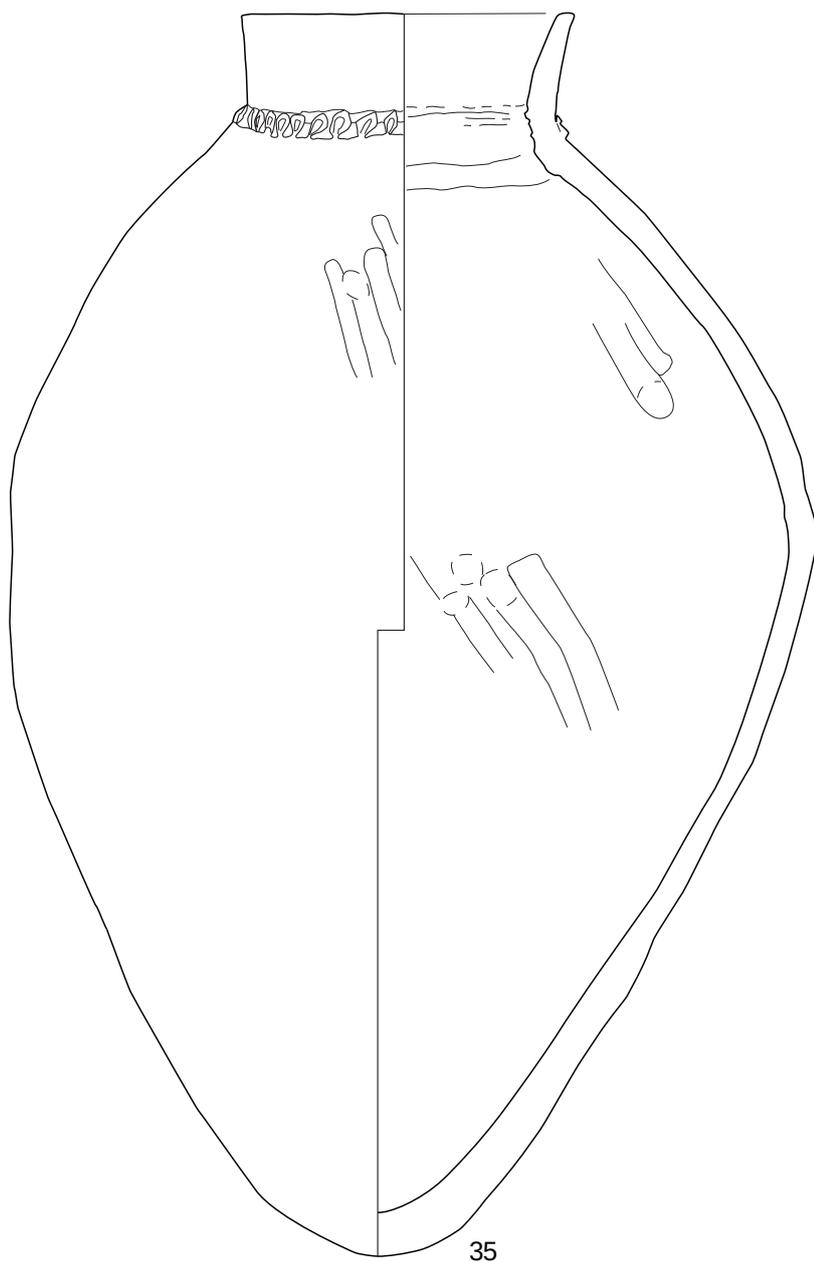
第 14 図 令和 3 年度トレンチ配置図



第 15 图 21 号、23 号地下式横穴墓遺物出土狀況



第 16 図 14 号～ 18 号地下式横穴墓及び遺物出土状況 (47 ～ 50)



第 17 図 出土遺物 (8)

3 令和3年度調査出土遺物

(1) T 3

35は甕である。口縁端部にやや平坦面が形成され、肩部に刻みを施した突帯が巡る。底部は丸底で、やや中心がずれるいびつな作りをしている。

36は小型丸底壺である。口縁端部がわずかに内湾し、頸部はゆるやかにすぼまり胴部は丸みを帯びる。

37～41は高坏である。37～40は、坏部にゆるやかな稜をもって外反し、脚部はラップ状に開く。41は坏部に明確な稜をもって外反する。脚部は欠損しているが、ラップ状に開くと考えられる。

42は鉢の口縁部である。口縁部はやや外傾し、胴部は丸みを帯びて張り出している。

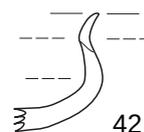
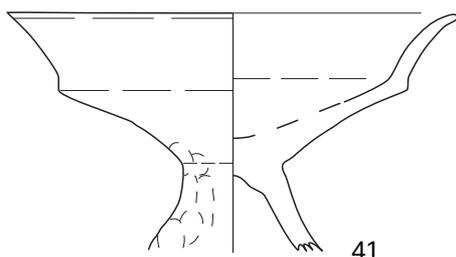
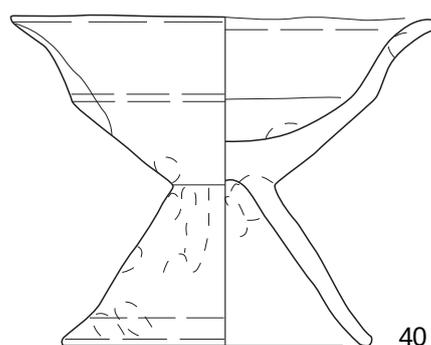
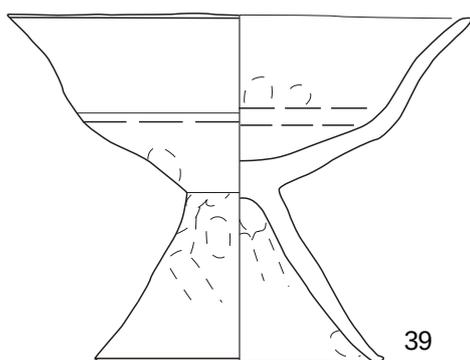
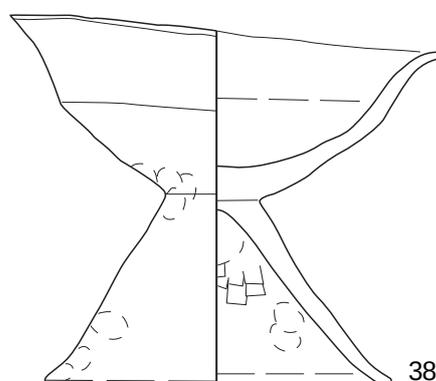
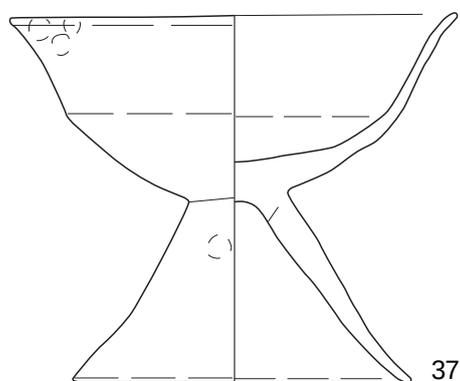
35～42は23号地下式横穴墓付近に広がるシミ部分で出土した。

(2) T 5

43・44は壺である。43は丸底の底部で、胴部の器壁は薄く底部にやや厚みがある。44は口縁部に近い胴部で、頸部から屈曲し、直線的に胴部が伸びる。

(3) T 6

45は、わずかに接合しないが同一個体と思わ



第18図 出土遺物(9)

れる。口縁部は外傾し、胴部は張り出して底部へ向かってすぼまる。

(4) T 3 14号地下式横穴墓

46は埴の口縁である。内湾しており、口縁端部にわずかに平坦面をもつ。

47・48は須恵器の壺である。47は頸部付近で、外面に施文等はなく、内面調整はナデを行っている。48は胴部で、外面には平行タタキが施されている。14号地下式横穴墓の崩落した玄室上か

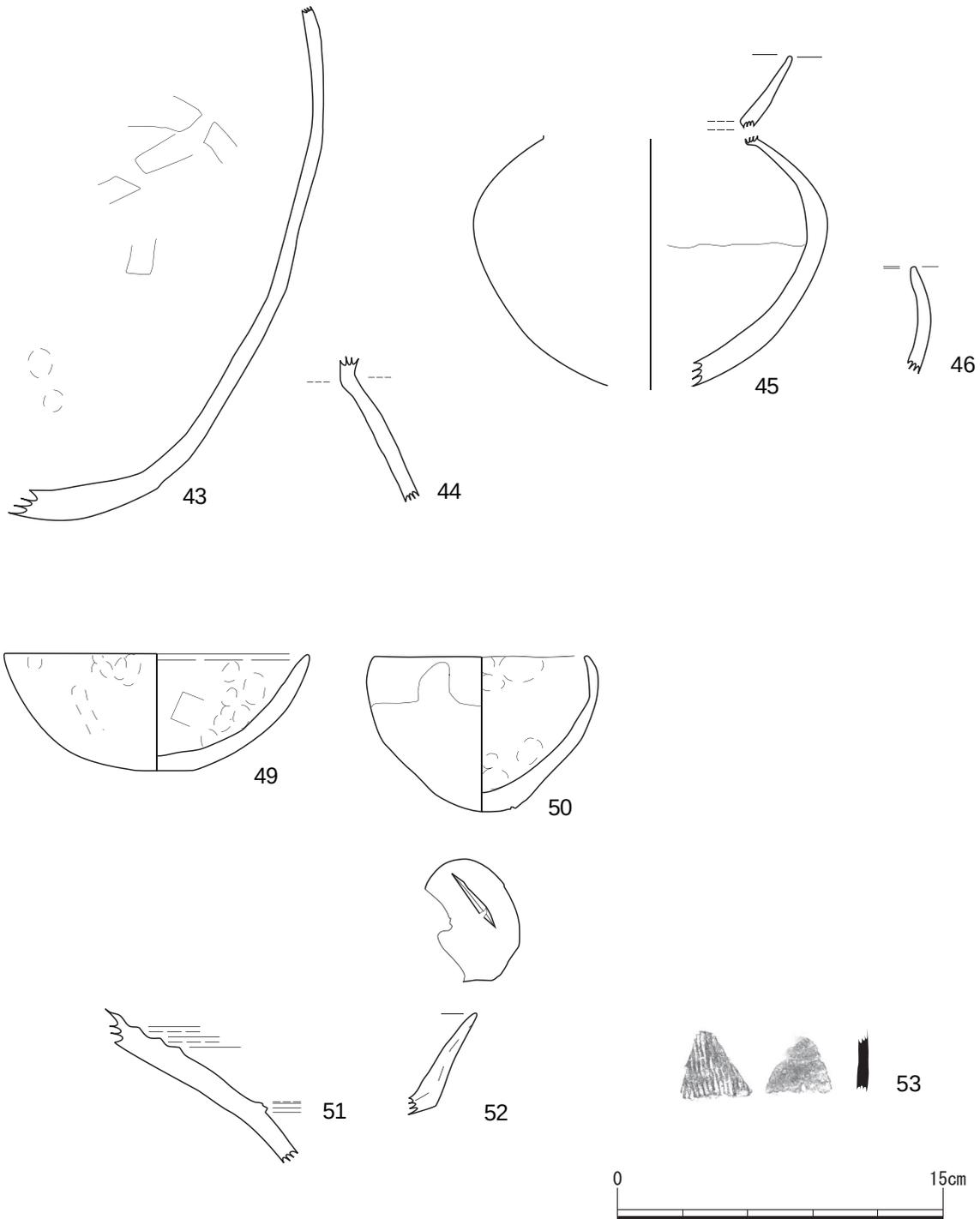
ら出土した。

(5) T 7

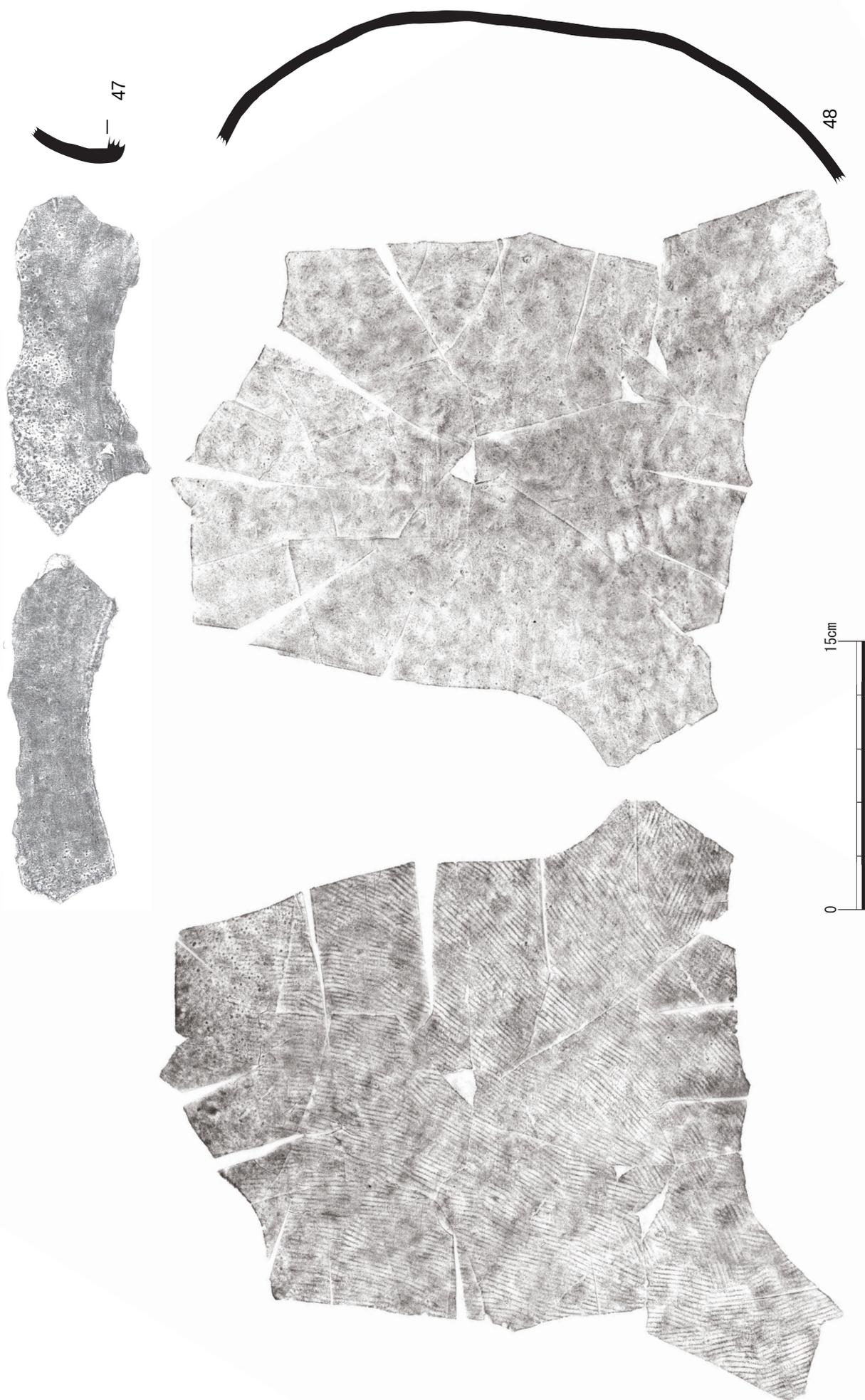
49・50は鉢である。49は浅く、器形は半円形のような丸みをもつ。50は口縁部が内湾し、底部に向かってすぼまる。また、底部外面に工具が当たったと考えられる痕がみられる。

(6) T 9

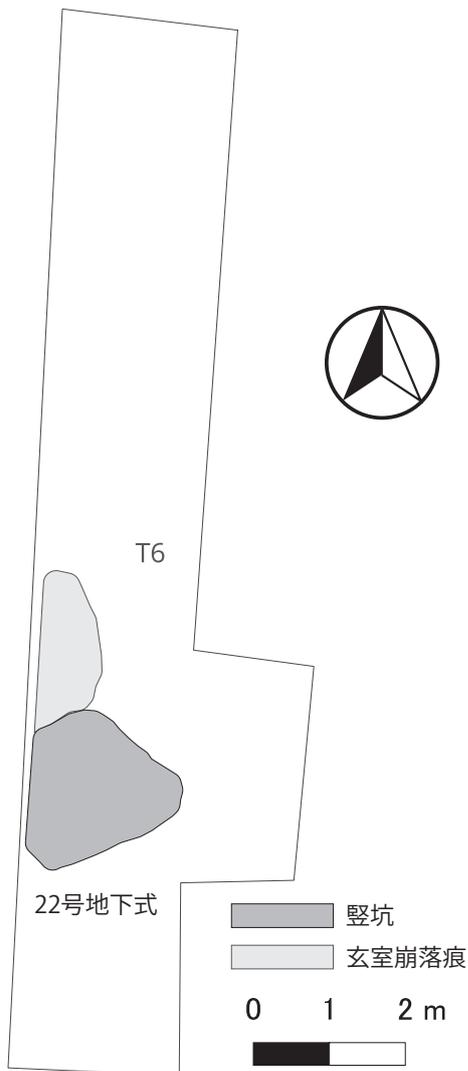
51は弥生時代の壺の胴部である。三角突帯を



第19図 出土遺物 (10)



第20図 出土遺物(11)



第 21 図 22 号地下式横穴墓

4 条、M 字状突帯を 1 条巡らせている。20 号地下式横穴墓の崩落した玄室上で出土した。崩落後に流入したものと考えられる。

52 は高坏の口縁部である。

53 は須恵器の甕の胴部である。外面に平行タタキがみられ、内面調整はナデを行う。

4 令和 4 年度調査出土遺物

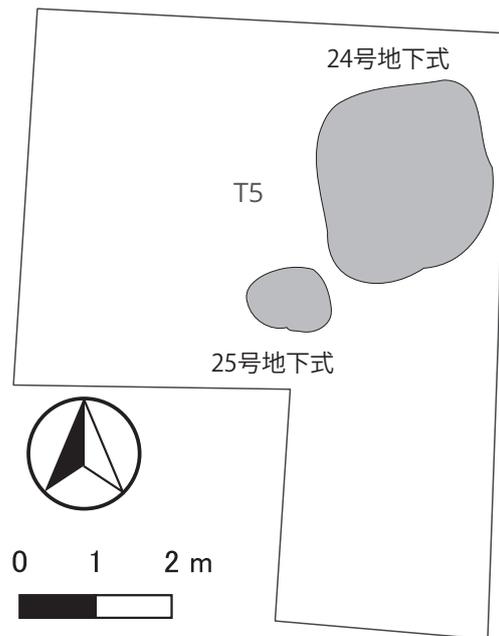
(1) 5 号墳

54 は壺である。

55～58 は高坏である。55・56 は屈曲して立ち上がり、口縁端部でさらに外傾する。57 は欠損部分が多いが、口縁端部に丸みをもつ。58 は坏部底面で、脚部は欠損している。

59 は近世の甕の口縁である。陶器製で、口縁部断面形が四角い。

60～86、89 は須恵器である。60 は口縁部で、



第 22 図 24 号・25 号地下式横穴墓

口縁端部に三角形状の突帯を巡らせ、その直下に 1 条の沈線と三角形状の突帯を巡らせる。61～86、89 は甕の胴部で、61～73、75・76、78～80、82～86 は外面に平行タタキを、74・77・89 は格子目タタキを施す。81 は横方向の沈線がみられる。85・86 は T5 から出土し、そのほかは 5 号墳での表採、および 5 号墳に設定したトレンチから出土した。

87 は壺の口縁部、88 は高坏の口縁部である。T6 から出土した

(2) 10～14 号墳

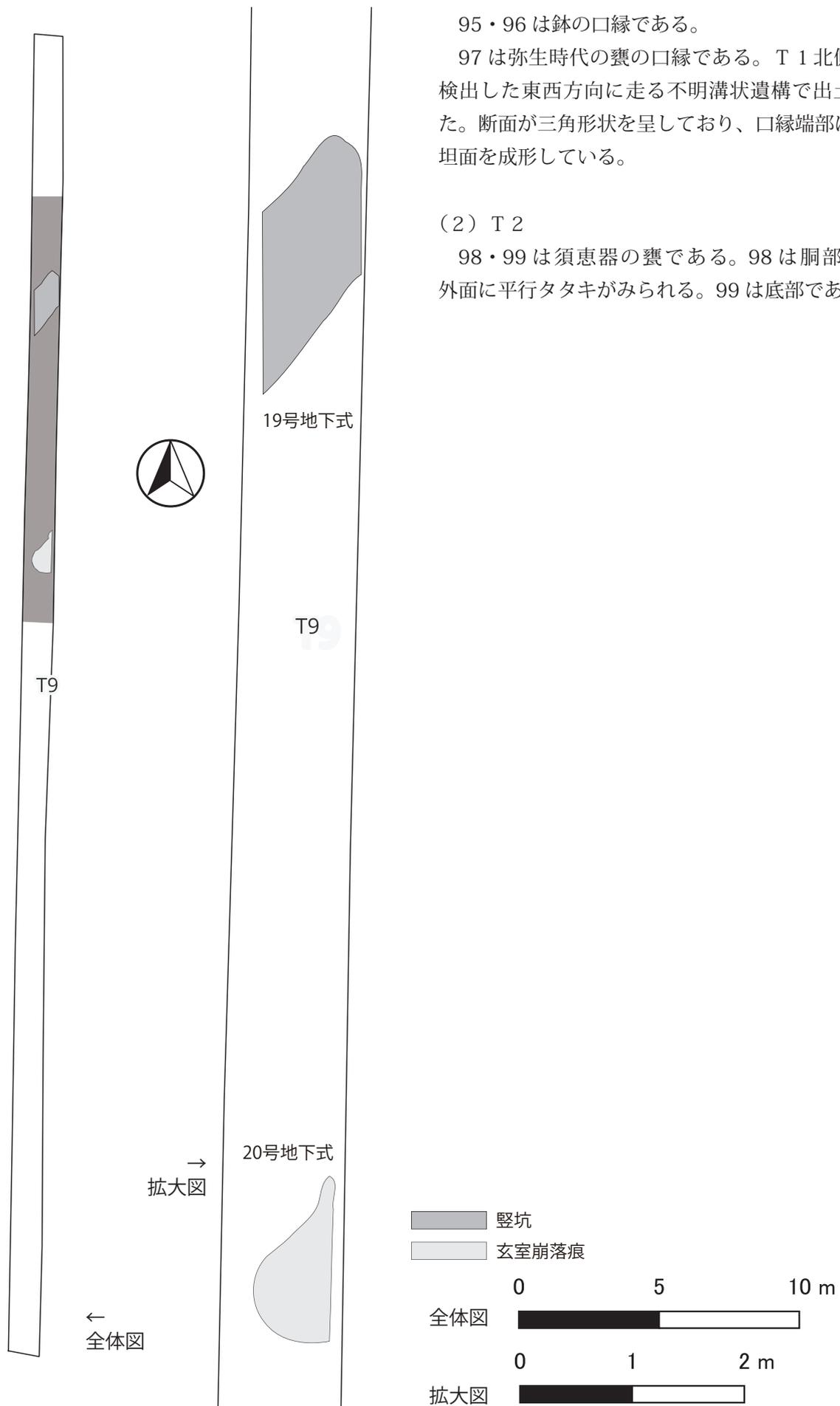
90・91 は須恵器の甕の胴部である。T1 から出土した。

92 は縄文時代の平底の底部である。T4 から出土した。

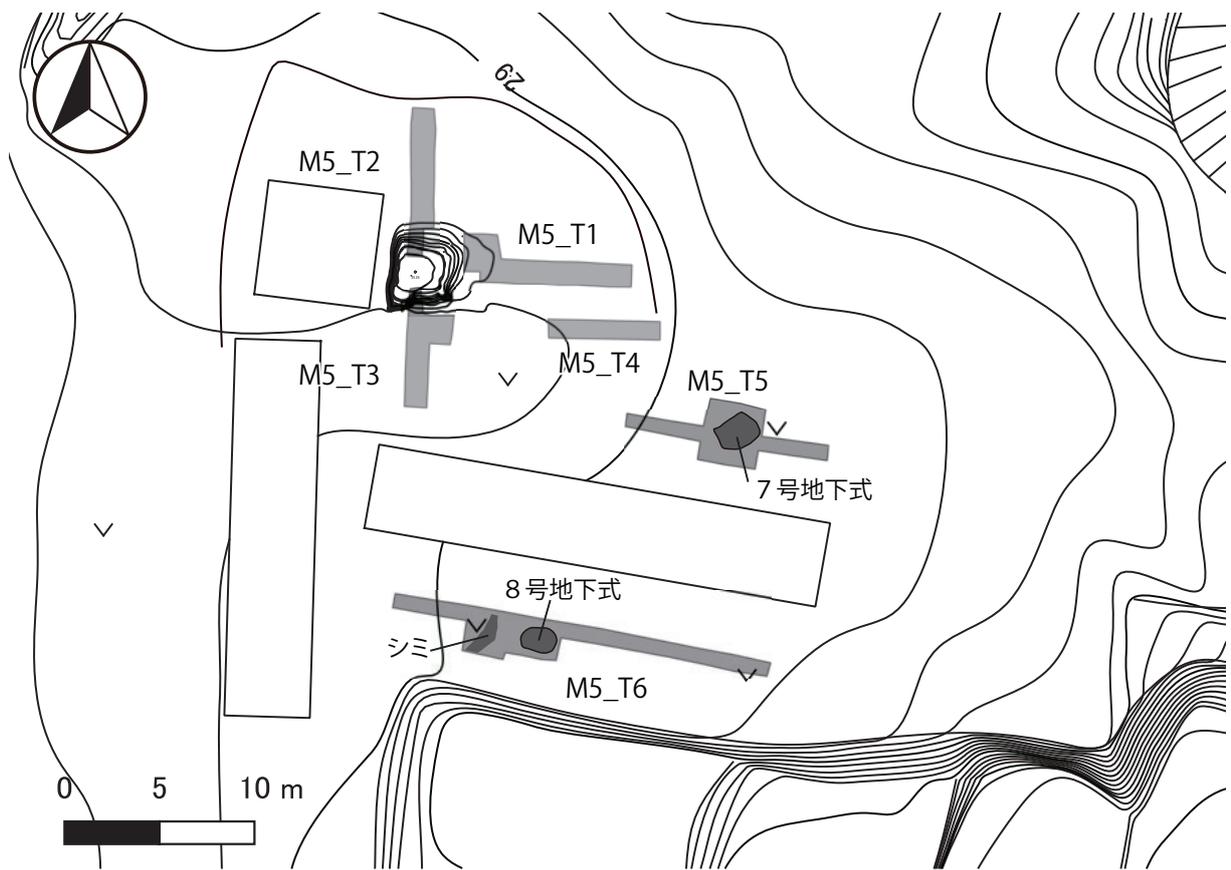
5 令和 5 年度調査出土遺物

(1) T 1

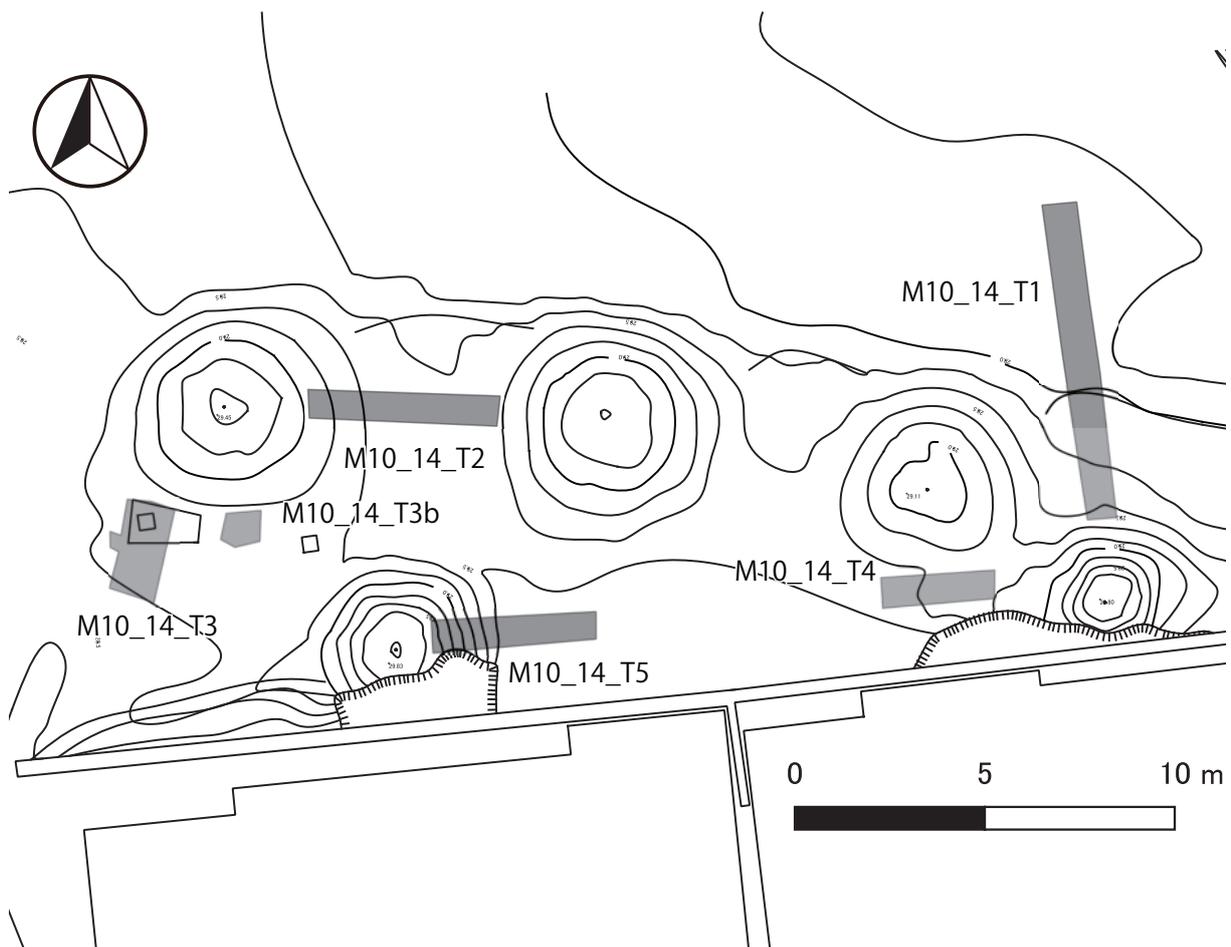
93・94 は壺である。93 は小型の壺で、口縁部は外傾し胴部はやや張り出す。底部は平底で、内面には器面調整の際について工具痕がみられる。21 号墳周溝内で 9 号地下式横穴墓竪坑上部で出土した。94 は壺の底部である。わずかに底面が成形されており、ゆるやかに広がりながら立ち上がる。



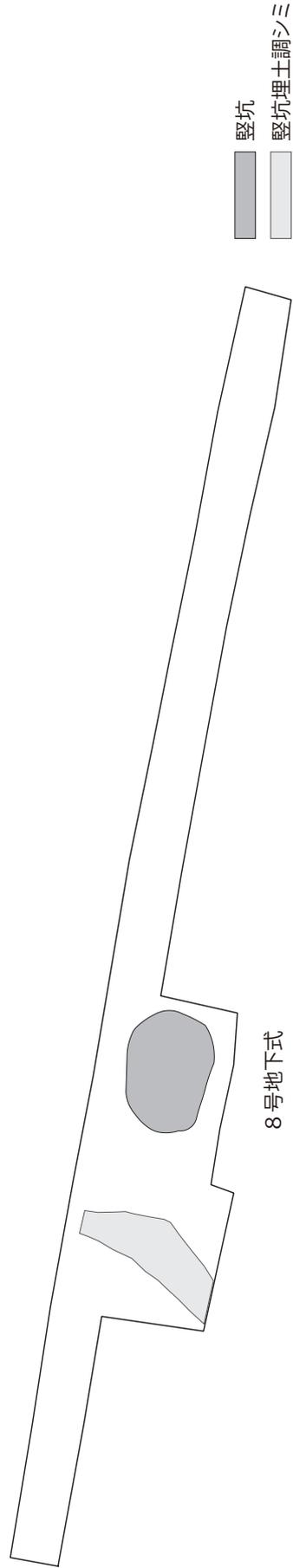
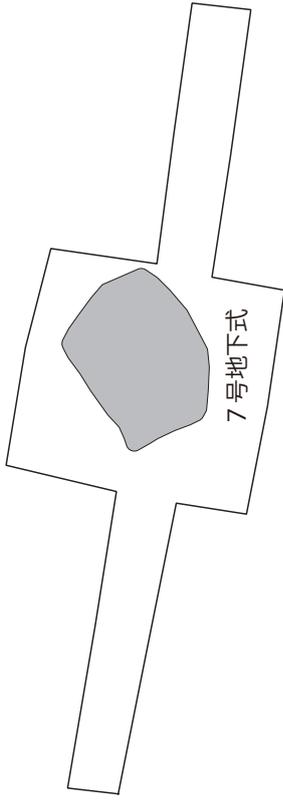
第 23 図 R3_T3 遺物出土状況及び地下式横穴墓



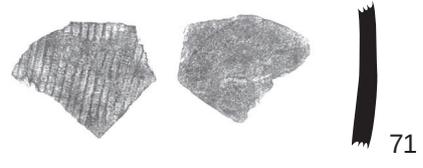
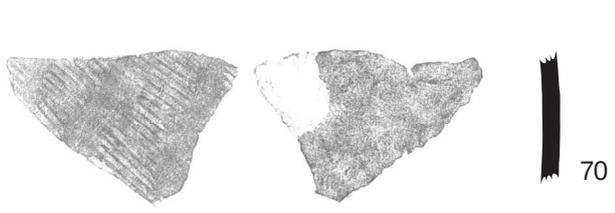
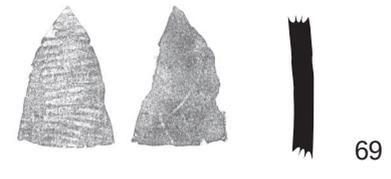
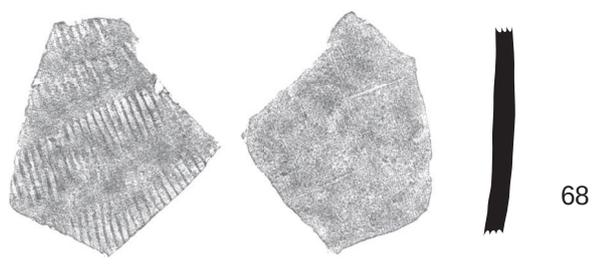
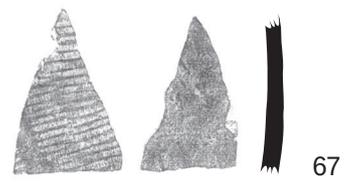
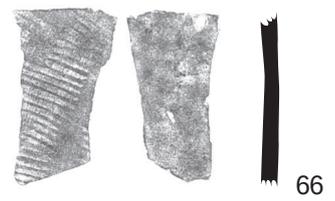
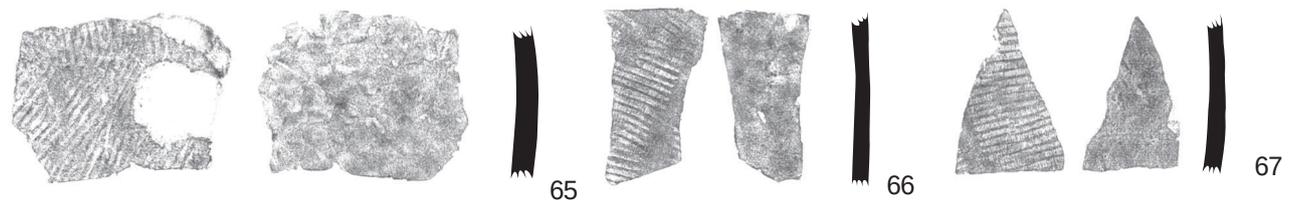
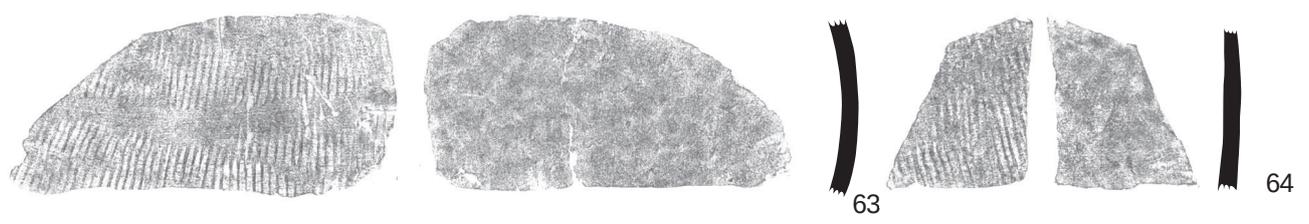
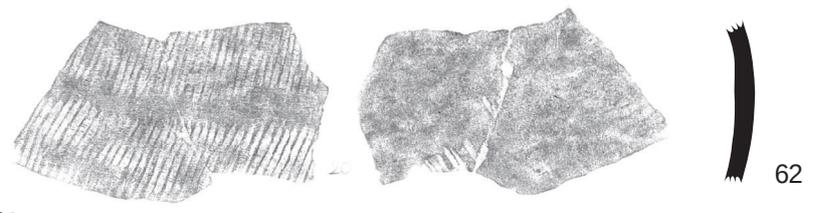
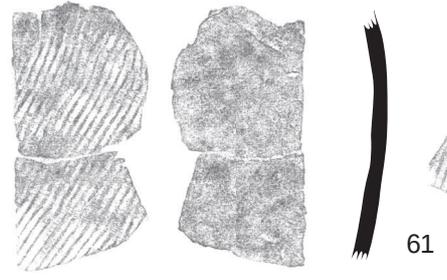
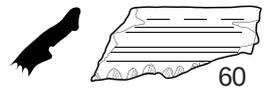
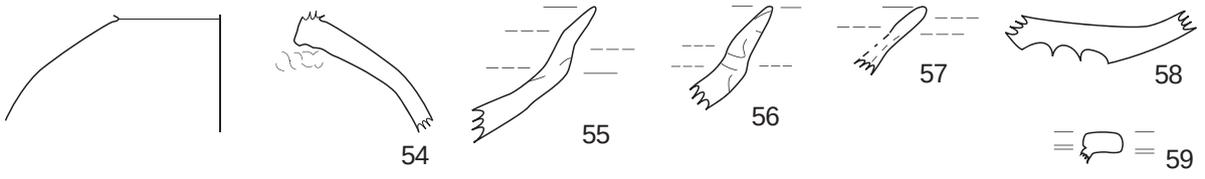
第 24 図 令和 4 年度トレンチ配置図及び地下式横穴墓竪坑（5号墳周辺）



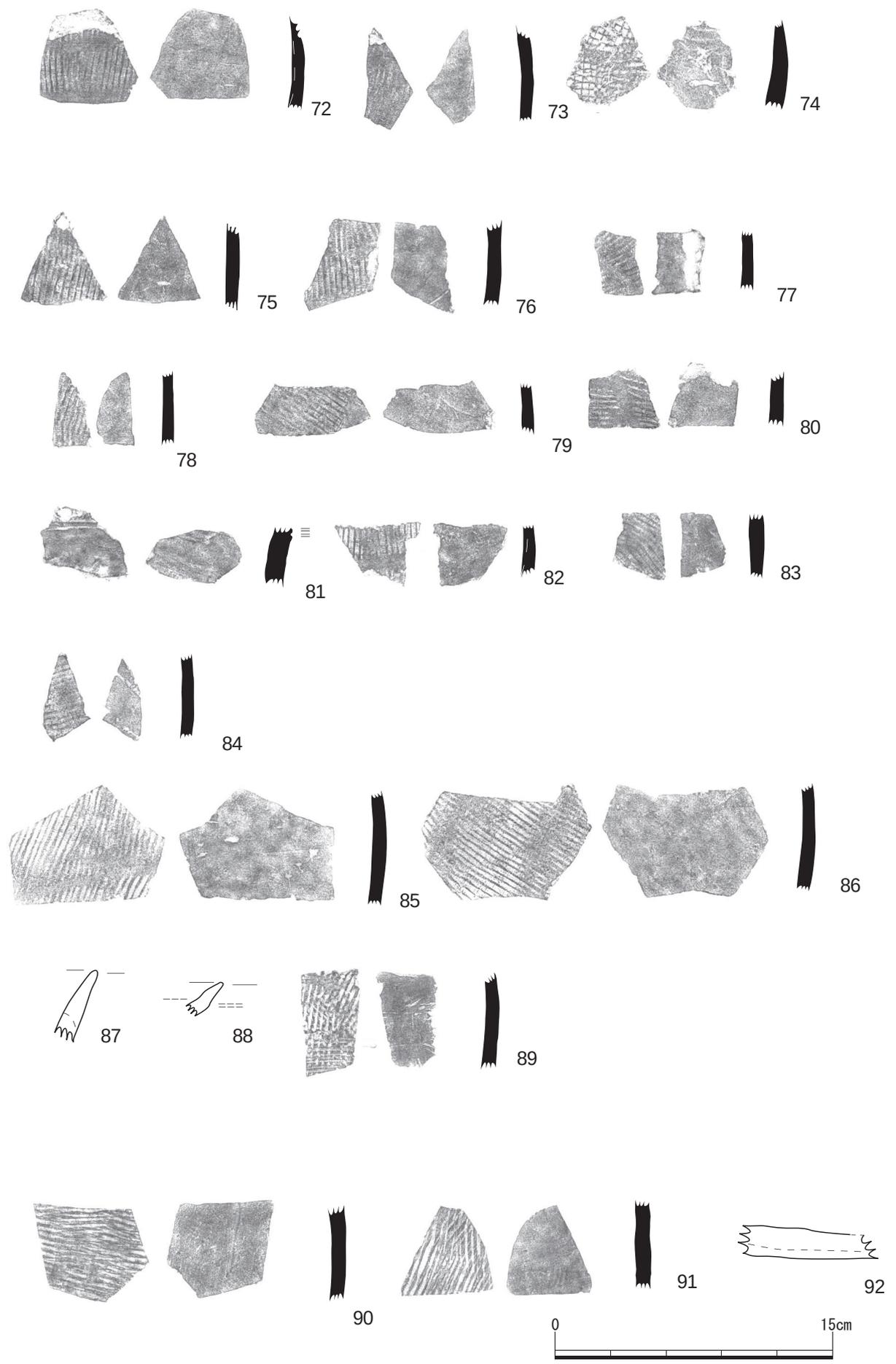
第 25 図 令和 4 年度トレンチ配置図（10号～14号墳）



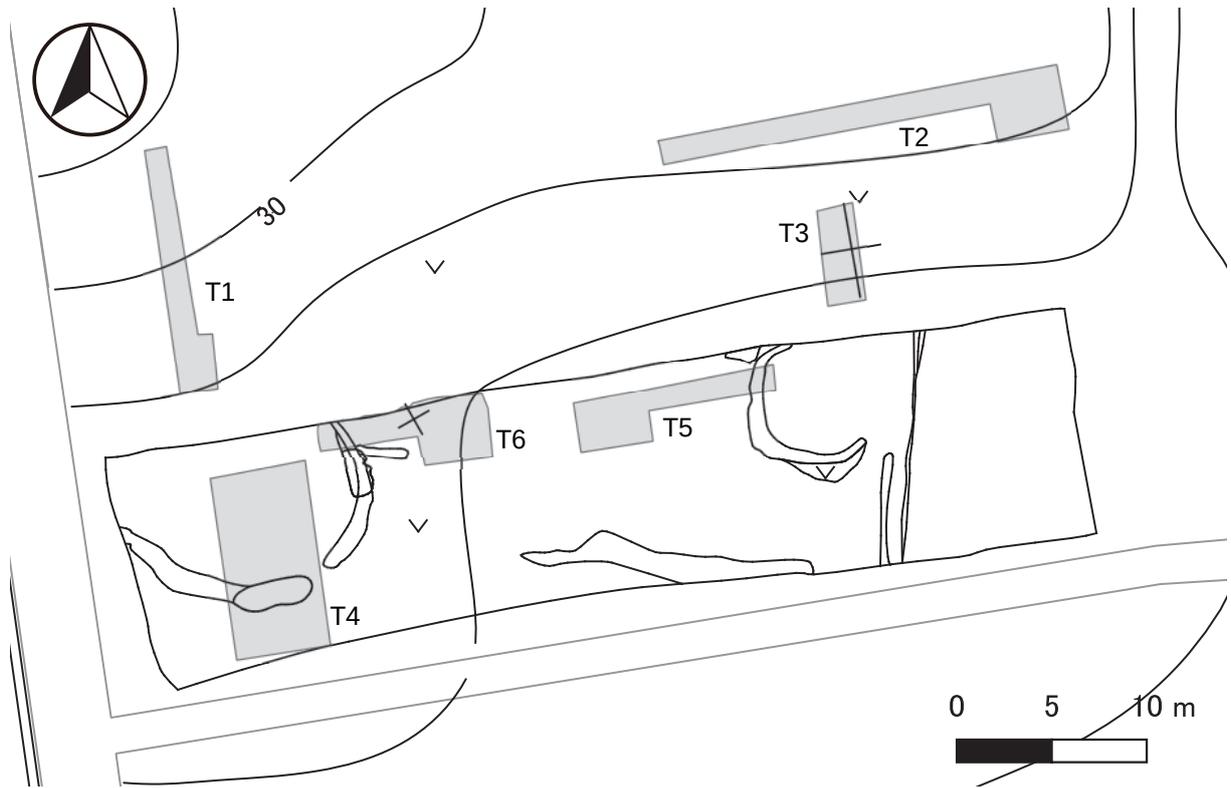
第26図 7号・8号地下式横穴墓



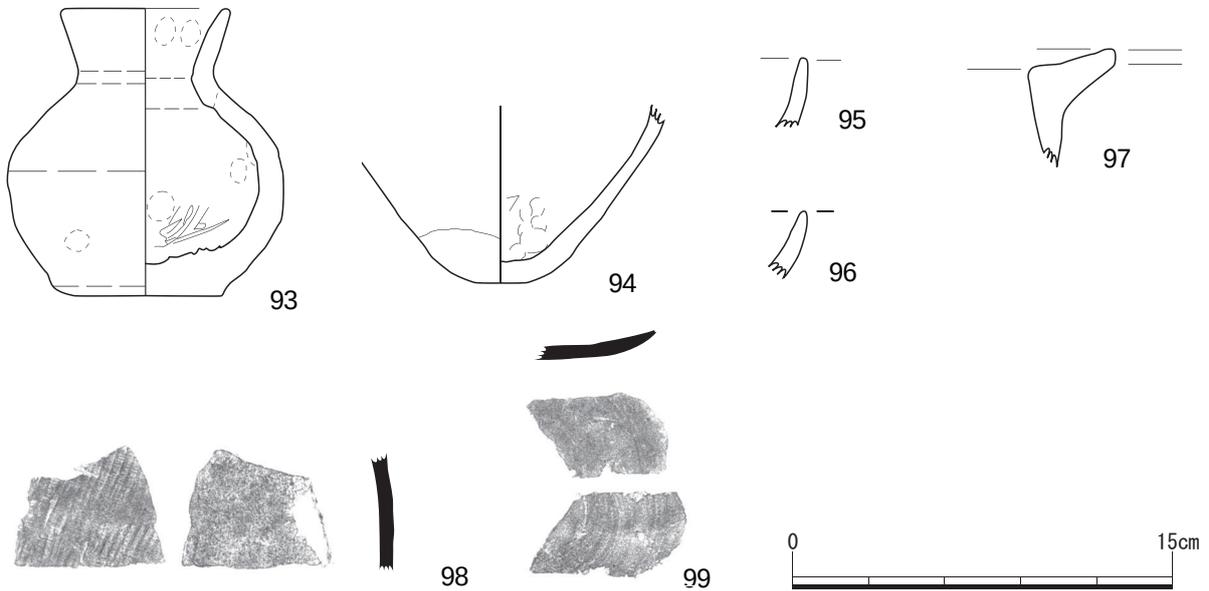
第 27 图 出土遺物 (12)



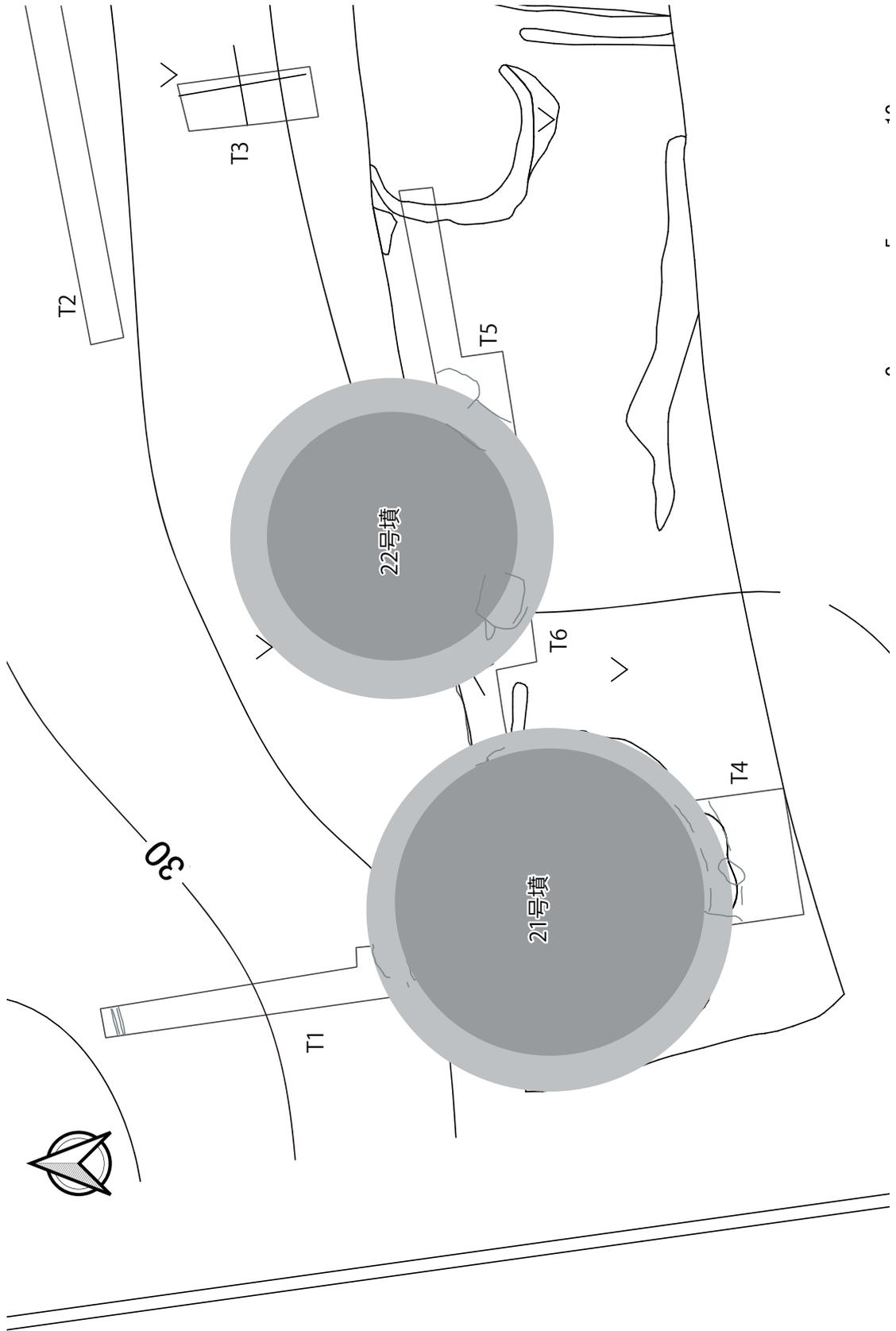
第 28 图 出土遺物 (13)



第 29 図 令和 5 年度トレンチ配置図 (R1 と合成)



第 30 図 出土遺物 (14)



第31图 21号墳・22号墳復元図（推定）

| 掲載 番号 | 時代 | 器種 | 部位等 | 口径 | 底径 | 器高 | 調整内 | 調整外 | 色調内 | | 色調外 | | 備考 | 調査 年 | 出土 位置 |
|----------|----|----|-----|------|------|--------|--------------------|-----------|----------|-----------|----------------------|-------------|--------------------|---------|----------|
| 1 | 古墳 | 壺 | | 8 | 4.8 | 12.5 | ミガキ ナデ ユビオサエ | ミガキ | 5YR5/4 | にぶい 赤褐 | 10YR4/6～ 7.5YR6/6 | 赤～橙 | 穿孔 | R1 | |
| 2 | 古墳 | 壺 | | 6.5 | 3.9 | 8.8 | ナデ ユビオサエ | ナデ ミガキ | 10YR5/3 | にぶい 黄褐 | 7.5YR6/4～ 10YR4/1 | にぶい橙 ～褐灰 | | R1 | |
| 3 | 古墳 | 壺 | 底部 | — | 2 | (11.2) | ナデ | ナデ | 7.5YR4/3 | 褐 | 7.5YR4/4 | 褐 | 口縁部欠損 | R1 | |
| 4 | 古墳 | 壺 | | 13 | 2.5 | 7.4 | ナデ | ナデ | 7.5YR4/3 | 褐 | 7.5YR4/3 7.5YR4/2 | 褐 灰褐 | | R1 | |
| 5 | 古墳 | 壺 | | 13.1 | 2.5 | 6.3 | ナデ | ナデ | 7.5YR4/4 | 褐 | 7.5YR4/3 7.5YR4/2 | 褐 灰褐 | | R1 | |
| 6 | 古墳 | 壺 | | 12.7 | 1.1 | 6.7 | ナデ | ナデ | 5YR4/3 | にぶい 赤褐 | 5YR4/3 | にぶい 赤褐 | | R1 | |
| 7 | 古墳 | 壺 | | 12.6 | — | (7.2) | ナデ | ナデ | 5YR4/4 | にぶい 赤褐 | 5YR4/6 | 赤褐 | | R1 | |
| 8 | 古墳 | 壺 | | 12.4 | 3.8 | 6.1 | ナデ | ナデ | 5YR4/4 | にぶい 赤褐 | 5YR4/3 | にぶい 赤褐 | | R1 | |
| 9 | 古墳 | 壺 | | 11.8 | — | (6.2) | ナデ | ナデ | 7.5YR4/4 | 褐 | 7.5YR4/3 | 褐 | | R1 | |
| 10 | 古墳 | 高坏 | | 25.8 | 17.1 | 21.9 | ナデ | ナデ | 5YR4/6 | 赤褐 | 5YR5/6 | 明赤褐 | | R1 | |
| 11 | 古墳 | 高坏 | | 20.5 | 14 | 15.3 | ナデ | ナデ | 5YR5/6 | 明赤褐 | 5YR5/6 | 明赤褐 | | R1 | |
| 12 | 古墳 | 高坏 | | 17 | 12.8 | 15 | ナデ | ナデ | 5YR5/4 | にぶい 赤褐 | 5YR5/6 | 明赤褐 | | R1 | |
| 13 | 古墳 | 高坏 | | 18.6 | 12.4 | 16.8 | ナデ | ナデ ミガキ | 7.5YR6/6 | 橙 | 7.5YR6/8 | 橙 | 脚内部 7.5YR3/1 黒褐 | R1 | |
| 14 | 古墳 | 高坏 | | 17.4 | 13.6 | 15.1 | ナデ ミガキ | ナデ ミガキ | 5YR5/6 | 明赤褐 | 5YR5/6 | 明赤褐 | | R1 | |
| 15 | 古墳 | 高坏 | | 19.2 | 13 | 13.5 | ナデ | ナデ ミガキ | 2.5YR5/6 | 明赤褐 | 2.5YR5/6 | 明赤褐 | | R1 | |
| 16 | 古墳 | 高坏 | | 17.3 | 14 | 14.2 | ナデ | ナデ | 2.5YR5/6 | 明赤褐 | 2.5YR5/6 | 明赤褐 | | R1 | |
| 17 | 古墳 | 高坏 | | 18.4 | 12 | 13.9 | ナデ | ナデ ミガキ | 5YR5/6 | 明赤褐 | 5YR5/6 | 明赤褐 | | R1 | |
| 18 | 古墳 | 高坏 | | 16.9 | 12.7 | 12.2 | ナデ | ナデ | 5YR6/8 | 橙 | 5YR6/8 | 橙 | | R1 | |
| 19 | 古墳 | 高坏 | 坏部 | 18 | — | (6.5) | ナデ ミガキ | ナデ ミガキ | 7.5YR7/6 | 橙 | 5YR7/6 | 橙 | | R1 | |
| 20 | 古墳 | 高坏 | 坏部 | 17.6 | — | (5.5) | ナデ | ナデ | 2.5YR5/6 | 明赤褐 | 2.5YR5/6 | 明赤褐 | | R1 | |
| 21 | 古墳 | 高坏 | 坏部 | 16.2 | — | — | ナデ | ナデ | 2.5YR5/6 | 明赤褐 | 2.5YR5/8 | 明赤褐 | | R1 | |
| 22 | 古墳 | 高坏 | 坏部 | 16.4 | — | (7.2) | ナデ | ナデ | 2.5YR5/6 | 明赤褐 | 5YR5/6 | 明赤褐 | | R1 | |
| 23 | 古墳 | 高坏 | 脚部 | — | 11.5 | — | ナデ | ナデ ミガキ | 5YR5/6 | 明赤褐 | 5YR5/6 | 明赤褐 | | R1 | |
| 24 | 古墳 | 高坏 | 脚部 | — | 10.5 | (6.7) | ナデ | ナデ ミガキ | 5YR7/4 | にぶい 橙 | 5YR6/6 | 橙 | | R1 | |
| 25 | 古墳 | 高坏 | 脚部 | — | 13.4 | (7.9) | ナデ | ナデ | 5YR5/8 | 明赤褐 | 5YR5/8 | 明赤褐 | | R1 | |

第3表 遺物観察表(1)

| 掲載 番号 | 時代 | 器種 | 部位等 | 口径 | 底径 | 器高 | 調整内 | 調整外 | 色調内 | | 色調外 | | 備考 | 調査 年 | 出土 位置 |
|----------|----|----|-----|------|------|--------|----------------------|-------------------|----------------------|-------------|----------------------|-------------|---------------|---------|----------|
| 26 | 古墳 | 高坏 | 脚部 | — | 12.6 | — | ナデ | ナデ ミガキ (風化) | 7.5YR4/4 | 褐 | 7.5YR4/4 | 褐 | | R1 | |
| 27 | 古墳 | 甕 | 胴部 | — | — | — | ナデ | 工具痕 ナデ | 2.5YR4/6 | 赤褐 | 2.5YR4/4 | にぶい 赤褐 | 胴部最大径 22.0 | R2 | |
| 28 | 古墳 | 甕 | 胴部 | — | — | — | ナデ | ナデ | 10YR5/4 | にぶい 黄褐 | 10YR4/4 | 褐 | | R2 | |
| 29 | 古墳 | 壺 | 底部 | — | — | — | ナデ | 粗いナデ | 7.5YR5/4 | にぶい 褐 | 5YR5/4 | にぶい 赤褐 | | R2 | |
| 30 | 古墳 | 壺 | | 12.4 | 1.4 | 10.1 | ナデ | ミガキ (風化) | 5YR4/6 | 赤褐 | 2.5YR4/6 | 赤褐 | | R2 | |
| 31 | 古墳 | 壺 | | 11.4 | 0.9 | 8.7 | ミガキ ナデ | ミガキ | 7.5R4/4 | にぶい 赤 | 7.5R4/6 | 赤 | | R2 | |
| 32 | 古墳 | 埴 | | 11.9 | 0.5 | 9.3 | ナデ | ナデ | 5YR4/4 | にぶい 赤褐 | 5YR4/4 | にぶい 赤褐 | | R2 | |
| 33 | 古墳 | 甕 | | 26.2 | — | 52.4 | ナデ 工具タタキ ユビオサエ | ナデ 工具タタキ | 10Y5/1～ 10Y3/1 | 灰～オ リーブ黒 | 10Y5/1～ 10Y3/1 | 灰～オ リーブ黒 | 底部穿孔 | R2 | |
| 34 | 古墳 | 甕 | | 21 | — | 35.7 | ナデ 工具 タタキ | ナデ 工具タタキ | 7.5YR5/1 ～2.5Y6/3 | 灰～に ぶい黄 | 7.5YR5/1 ～2.5Y6/3 | 灰～に ぶい黄 | 底部穿孔 | R2 | |
| 35 | 古墳 | 甕 | | 13.1 | 0.7 | 49.5 | ナデ | ナデ | 2.5YR5/6 | 明赤褐 | 2.5YR5/6 | 明赤褐 | | R3 | T3 |
| 36 | 古墳 | 壺 | | 8 | 3 | 14.1 | ナデ | ナデ ミガキ | 2.5YR4/4 | にぶい 赤褐 | 2.5YR4/4 | にぶい 赤褐 | | R3 | T3 |
| 37 | 古墳 | 高坏 | | 17.8 | 13.5 | 14.5 | ナデ | ナデ | 2.5YR5/6 | 明赤褐 | 2.5YR5/6 | 明赤褐 | | R3 | T3 |
| 38 | 古墳 | 高坏 | | 17.2 | 13.8 | 14.8 | ナデ | ナデ | 5YR4/4 | にぶい 赤褐 | 5YR4/3 | にぶい 赤褐 | | R3 | T3 |
| 39 | 古墳 | 高坏 | | 19.5 | 11.4 | 13.9 | ナデ | ナデ | 5YR4/6 | 赤褐 | 5YR4/4 | にぶい 赤褐 | | R3 | T3 |
| 40 | 古墳 | 高坏 | | 17 | 12 | 13.3 | ナデ | ナデ | 7.5YR5/3 | にぶい 褐 | 7.5YR4/3 | 褐 | | R3 | T3 |
| 41 | 古墳 | 高坏 | | 18 | — | (11.5) | ナデ ミガキ | ナデ ミガキ | 7.5YR5/6 | 明褐 | 7.5YR4/6 | 褐 | 脚部欠損 | R3 | T3 |
| 42 | 古墳 | 鉢 | 口縁部 | — | — | (4.7) | ナデ | ナデ | 5YR7/4 | にぶい 橙 | 5YR7/6 | 橙 | | R3 | T3 |
| 43 | 古墳 | 壺 | 底部 | — | — | (23.9) | 工具痕 ナデ | 工具痕 指頭痕 | 2.5YR5/4 | にぶい 赤褐 | 2.5YR4/1 | 赤灰 | | R3 | T5 |
| 44 | 古墳 | 壺 | 胴部 | — | — | — | 工具ナデ ナデ | 工具ナデ ナデ | 2.5YR4/3 | にぶい 赤褐 | 2.5YR5/4 | にぶい 赤褐 | | R3 | T5 |
| 45 | 古墳 | 壺 | 口縁部 | — | — | — | ナデ | ナデ | 2.5YR6/6 | 橙 | 2.5YR6/6 | 橙 | 胴部最大径 16.4 | R3 | T6 |
| 46 | 古墳 | 埴 | 口縁 | — | — | — | ナデ | ナデ | 2.5YR5/6 | 明赤褐 | 2.5YR5/6 | 明赤褐 | | R3 | T3C6 |
| 47 | 古墳 | 壺 | 胴部 | — | — | — | 工具痕 ナデ消し | 工具痕 | 10Y5/1 | 灰 | 10Y5/2 | オリ ーブ灰 | | R3 | C6 |
| 48 | 古墳 | 壺 | 胴部 | — | — | — | 工具痕 | 工具痕 ナデ消し | 5Y6/2 | 灰オ リーブ | 5Y3/2 | オリ ーブ黒 | | R3 | C6 |
| 49 | 古墳 | 鉢 | | 14.2 | — | 5.3 | ナデ | ナデ | 2.5YR5/6 | 明赤褐 | 2.5YR5/8 | 明赤褐 | | R3 | T7 |
| 50 | 古墳 | 鉢 | | 10 | — | 7.2 | ナデ | ナデ | 7.5YR8/4 | 浅黄色 | 7.5YR8/4 | 浅黄色 | | R3 | T7 |

第4表 遺物観察表(2)

| 掲載 番号 | 時代 | 器種 | 部位等 | 口径 | 底径 | 器高 | 調整内 | 調整外 | 色調内 | | 色調外 | | 備考 | 調査 年 | 出土 位置 |
|----------|----|----|-----|----|----|-------|-----|-----------|----------|-----------|----------|-----|---------|---------|--------------|
| 51 | 弥生 | 壺 | 胴部 | — | — | — | ナデ | ナデ | 2.5YR5/6 | 明赤褐 | 2.5YR5/6 | 明赤褐 | 補修痕あり | R3 | T9 |
| 52 | 古墳 | 高坏 | 口縁部 | — | — | — | ナデ | ナデ | 5YR7/4 | にぶい 橙 | 5YR6/6 | 橙 | | R3 | T9 |
| 53 | 古墳 | 甕 | 胴部 | — | — | — | ナデ | 工具 タタキ | 2.5GY4 | 灰 | 2.5GY4 | 灰 | | R3 | T9 |
| 54 | 古墳 | 壺 | 胴部 | — | — | — | ナデ | ナデ | 5YR5/4 | にぶい 赤褐 | 2.5YR4/6 | 赤褐 | 頸部径 8.0 | R3 | M5 |
| 55 | 古墳 | 高坏 | 坏部 | — | — | (5.5) | ナデ | ナデ | 2.5YR4/8 | 赤褐 | 2.5YR5/6 | 明赤褐 | | R4 | M5 |
| 56 | 古墳 | 高坏 | 口縁 | — | — | — | ナデ | ナデ | 2.5YR5/6 | 明赤褐 | 2.5YR6/8 | 橙 | | R3 | M5 |
| 57 | 古墳 | 高坏 | 口縁 | — | — | — | ナデ | ナデ | 5YR6/6 | 橙 | 5YR5/6 | 明赤褐 | | R4 | M5T1 |
| 58 | 古墳 | 高坏 | 坏底部 | — | — | — | ナデ | ナデ | 2.5YR6/6 | 橙 | 2.5YR6/6 | 橙 | | R4 | M5 |
| 59 | 近世 | 甕 | 口縁 | — | — | — | — | — | 7.5YR3/3 | 暗褐 | 7.5YR3/3 | 暗褐 | 陶器 | R4 | M5T1 M5T2 |
| 60 | 古墳 | 壺 | 口縁 | — | — | — | ナデ | ナデ | 7.5YR5/1 | 褐灰 | 7.5YR5/1 | 褐灰 | | R3 | M5 |
| 61 | 古墳 | 甕 | 胴部 | — | — | — | ナデ | 工具 タタキ | 10YR6/1 | 褐灰 | 10YR5/1 | 褐灰 | | R4 | M5T3 |
| 62 | 古墳 | 甕 | 胴部 | — | — | — | ナデ | 工具 タタキ | 5YR5/1 | 褐灰 | 5YR5/1 | 褐灰 | | R4 | M5 |
| 63 | 古墳 | 甕 | 胴部 | — | — | — | ナデ | 工具 タタキ | 2.5YR6/1 | 黄灰 | 5YR5/1 | 褐灰 | | R4 | M5T3 |
| 64 | 古墳 | 甕 | 胴部 | — | — | — | ナデ | 工具 タタキ | 5YR6/1 | 褐灰 | 5YR5/1 | 褐灰 | | R4 | M5 |
| 65 | 古墳 | 甕 | 胴部 | — | — | — | ナデ | 工具 タタキ | 10YR7/1 | 灰白 | N6 | 灰 | | R3 | M5 |
| 66 | 古墳 | 甕 | 胴部 | — | — | — | ナデ | 工具 タタキ | 10YR7/1 | 灰白 | N6 | 灰 | | R3 | M5 |
| 67 | 古墳 | 甕 | 胴部 | — | — | — | ナデ | 工具 タタキ | 5YR6/1 | 褐灰 | 5YR6/1 | 褐灰 | | R3 | M5 |
| 68 | 古墳 | 甕 | 胴部 | — | — | — | ナデ | 工具 タタキ | 7.5YR6/1 | 褐灰 | 7.5YR6/1 | 褐灰 | | R4 | M5 |
| 69 | 古墳 | 甕 | 胴部 | — | — | — | ナデ | 工具 タタキ | 2.5YR6/1 | 黄灰 | 2.5YR6/1 | 黄灰 | | R4 | M5T3 |
| 70 | 古墳 | 甕 | 胴部 | — | — | — | ナデ | 工具 タタキ | 7.5YR6/1 | 褐灰 | 2.5YR6/1 | 黄灰 | | R4 | M5 |
| 71 | 古墳 | 甕 | 胴部 | — | — | — | ナデ | ナデ | 5YR5/1 | 褐灰 | 5YR4/1 | 褐灰 | | R4 | M5T1 |
| 72 | 古墳 | 甕 | 胴部 | — | — | — | ナデ | 工具 タタキ | 2.5YR6/1 | 黄灰 | 7.5YR5/1 | 褐灰 | | R4 | M5 |
| 73 | 古墳 | 甕 | 胴部 | — | — | — | ナデ | 工具 タタキ | 2.5YR5/2 | 暗灰黄 | 7.5YR5/1 | 褐灰 | | R4 | M5 |
| 74 | 古墳 | 甕 | 胴部 | — | — | — | ナデ | 工具 タタキ | 2.5YR4/1 | 黄灰 | 2.5YR4/1 | 黄灰 | | R4 | M5 |
| 75 | 古墳 | 甕 | 胴部 | — | — | — | ナデ | 工具 タタキ | 7.5YR6/2 | 灰褐 | 7.5YR5/1 | 褐灰 | | R3 | M5 |

第5表 遺物観察表(3)

| 掲載 番号 | 時代 | 器種 | 部位等 | 口径 | 底径 | 器高 | 調整内 | 調整外 | 色調内 | | 色調外 | | 備考 | 調査 年 | 出土 位置 |
|----------|----|----|-----|-----|-----|-------|------|-----------|----------|-----------|----------|-----------|----|---------|-------------------|
| 76 | 古墳 | 甕 | 胴部 | — | — | — | ナデ | 工具 タタキ | 10YR6/1 | 褐灰 | 10YR6/1 | 褐灰 | | R4 | M5 |
| 77 | 古墳 | 甕 | 胴部 | — | — | — | ナデ | 工具 タタキ | 10YR6/2 | 灰黄褐 | 10YR5/1 | 褐灰 | | R4 | T2 |
| 78 | 古墳 | 甕 | 胴部 | — | — | — | ナデ | 工具 タタキ | 2.5YR5/2 | 暗灰黄 | 2.5YR6/1 | 黄灰 | | R4 | M5 |
| 79 | 古墳 | 甕 | 胴部 | — | — | — | ナデ | 工具 タタキ | 10YR5/2 | 灰黄褐 | 10YR5/1 | 褐灰 | | R4 | M5 |
| 80 | 古墳 | 甕 | 胴部 | — | — | — | ナデ | 工具 タタキ | 2.5YR6/2 | 灰黄 | 7.5YR6/1 | 褐灰 | | R4 | M5 |
| 81 | 古墳 | 甕 | 胴部 | — | — | — | ナデ | ナデ | 7.5YR4/1 | 褐灰 | 7.5YR4/1 | 褐灰 | | R4 | M5T1 |
| 82 | 古墳 | 甕 | 胴部 | — | — | — | ナデ | 工具 タタキ | 2.5YR7/1 | 灰白 | 5YR6/1 | 褐灰 | | R4 | M5 |
| 83 | 古墳 | 甕 | 胴部 | — | — | — | ナデ | 工具 タタキ | 10YR6/2 | 灰黄褐 | 10YR6/1 | 褐灰 | | R4 | T2 |
| 84 | 古墳 | 甕 | 胴部 | — | — | — | ナデ | 工具 タタキ | 2.5YR4/2 | 暗灰黄 | 2.5YR5/1 | 黄灰 | | R4 | M5 |
| 85 | 古墳 | 甕 | 胴部 | — | — | — | ナデ | 工具 タタキ | 10YR7/1 | 灰白 | 2.5YR5/1 | 黄灰 | | R4 | T5 |
| 86 | 古墳 | 甕 | 胴部 | — | — | — | ナデ | 工具 タタキ | 10YR7/1 | 灰白 | 2.5YR5/1 | 黄灰 | | R4 | T5 |
| 87 | 古墳 | 壺 | 口縁 | — | — | — | ナデ | ナデ | 2.5YR5/6 | 明赤褐 | 2.5YR5/6 | 明赤褐 | | R4 | T6 |
| 88 | 古墳 | 高坏 | 口縁 | — | — | — | ナデ | ナデ | 5YR5/4 | にぶい 赤褐 | 5YR5/4 | にぶい 赤褐 | | R4 | M5T6 |
| 89 | 古墳 | 甕 | 胴部 | — | — | — | ナデ | 工具 タタキ | 5YR6/1 | 褐灰 | 7.5YR6/1 | 褐灰 | | R4 | M5T6 |
| 90 | 古墳 | 甕 | 胴部 | — | — | — | ナデ | 工具 タタキ | 5YR4/1 | 褐灰 | 5YR4/1 | 褐灰 | | R4 | M10 ~ 14T1 |
| 91 | 古墳 | 甕 | 胴部 | — | — | — | ナデ | 工具 タタキ | 10YR4/1 | 褐灰 | 10YR4/1 | 褐灰 | | R4 | M14T1 |
| 92 | 縄文 | | 底部 | — | — | — | ナデ | ナデ | 7.5YR6/4 | にぶい 橙 | 7.5YR6/4 | にぶい 橙 | | R4 | M10 ~ 14 T4 |
| 93 | 古墳 | 壺 | | 6.4 | 5.9 | 11.5 | 工具ナデ | ナデ | 2.5YR5/6 | 明赤褐 | 2.5YR5/6 | 明赤褐 | | R5 | T1 |
| 94 | 古墳 | 壺 | 底部 | — | 2 | (7.1) | ナデ | ナデ | 2.5YR6/8 | 橙 | 5YR5/6 | 明赤褐 | | R5 | T1 |
| 95 | 古墳 | 鉢 | 口縁 | — | — | — | ナデ | ナデ | 2.5YR6/8 | 橙 | 2.5YR6/8 | 橙 | | R5 | T1 |
| 96 | 古墳 | 鉢 | 口縁 | — | — | — | ナデ | ナデ | 2.5YR6/8 | 橙 | 2.5YR6/6 | 橙 | | R5 | T1 |
| 97 | 弥生 | 甕 | 口縁 | — | — | — | ナデ | ナデ | 5YR6/6 | 橙 | 5YR6/6 | 橙 | | R5 | T1 |
| 98 | 古墳 | 甕 | 胴部 | — | — | — | ナデ | 工具 タタキ | 10YR6/1 | 褐灰 | 10YR5/1 | 褐灰 | | R5 | T2 |
| 99 | 古墳 | 甕 | 底部 | — | — | — | ナデ | ナデ | N5/ | 灰 | 10YR5/1 | 褐灰 | | R5 | T2 |

第6表 遺物観察表(4)

第5章 中間まとめ

第1節 成果

第1項 地下式横穴墓群

昭和60年の4号墳発掘調査での発見に端を発する「古墳周溝内に地下式横穴墓が構築される」例は、16号、17号の確認に続き、その後の橋本先生による18号墳の調査、市教委による15号墳の発掘調査においても同様の例が確認されてきた。岡崎古墳群内においては、周溝と地下式横穴墓はもはやセットが当然であるというほどに強い印象を抱いていた。

現在盛土による塚がみられる範囲は、北端を3号墳、南端を15号墳とし、令和元年度及び2年度で実施した地形測量で約77,000平米に及ぶ。古墳が残っているエリアの間に、かつては塚が存在したとされるエリアがあり、残念ながら多数の盛土塚が消失してしまい現在ではその姿を確認することはできなくなっている。市教委はその消失した塚が古墳であると想定し、地下に埋没しているであろう周溝を再発見することによる古墳の復元を目的とした調査を実施したが、周溝の確認はされなかった。周溝の確認には既往調査の成果により、紫ゴラ(874年 開聞岳起源)の堆積を鍵層とした。

結果として、地下式横穴墓が古墳周溝内に構築されるのではなく、単独で構築された地下式横穴墓がまとまって群をなしているエリアが想定できることが判明した。

地下式横穴墓の群としての存在は、鹿屋市内でも多数の例が知られており、主なものを挙げると「立小野堀遺跡」「町田堀遺跡」、鹿児島県指定文化財 短甲・衝角付冑が発見された「祓川地下式横穴墓群」、現在県内唯一の出土品である象嵌装大刀の出土した「中尾地下式横穴墓群」などがある。地下式横穴墓が群れて確認されるという一般的な存在形態が岡崎古墳群内で確認されたことは、盛土墳文化の地域における受容といった当地域の古墳時代の様相解明のために意義深い。

第2項 古墳の再発見

現在、岡崎古墳群では、盛土による塚が残るものは3号～5号、10号～15号、18号～20号の12基であり、確実に古墳であるものは4号、15号、18号、20号の4基である。5号墳及び10号～14号墳については、令和4年度に調査を実施したが、古墳もしくは古墳ではないとする確たる証拠を得られていない。また、19号墳については、橋本先生による調査で古墳ではないとされている。

1号墳、2号墳については、所在地が4号墳から北西に約650mの場所とされているが、記録によって位置が異なり、所在地についての確証が得られていない。

6号～9号墳については令和3年度調査エリア内に存在したとされ、古墳周溝の再発見により復元を試みたが、古墳周溝を確認することはできなかった。既往調査の例にならい、周溝内に堆積した紫ゴラを鍵層とした。調査地の土層は厚い黒色土がしっかりと残っており、見落としたとは考えていない。調査結果に基づき、かつて存在した盛土塚の性格・所在地についても検討する必要がある。

今期の発掘調査により、21号墳・22号墳の2基の古墳を再発見することができた。この2基が存在するエリアに注目すると、4号墳周辺でも16号、17号墳として周溝と周溝を利用して構築された地下式横穴墓が確認されている。

16号は4号墳の南東約35mの地点に位置し、周溝外側部分のみの確認ではあるが、推定直径24mとなることが想定され、4号墳の東側に位置する17号では周溝幅2.2m、深さ0.3mを測り、推定される直径は18mで、4号の周溝に近接する可能性が指摘されている。

今回発見した21号墳、22号墳についても、近接して築造されていることが確認できた。この発見は、当該エリアで古墳がある程度の数密集してつくられたことが想定できるのではないだろうか。現在は4号墳から南側に向かって緩やかな下りとなっている地形が、詳細な検討は不十分ではあるが、池田降下軽石の検出高さによると古墳時代は起伏がより大きかった可能性があり、古墳築造が可能な場所が限定的であった可能性があ

る。限定的なエリアを利用するため、必然的に古墳が近接したことは考えられないだろうか。

第2節 課題

第1項 遺跡の範囲

岡崎古墳群の範囲はどこからどこまでなのか。基本的情報でありながら、担当者の経験等による判断が先行し、記録や証拠書類といったものの検証に至っていなかった。令和3年度に事務局でも課題としていたが、明確な解決に至っておらず、今後も調査検討を進める必要がある。

第2項 各古墳の特定

1 20号・18号・15号墳エリア

2基の前方後円墳(20号・15号)と2基の円墳(18号・19号)から構成される。19号墳については古墳ではない可能性が指摘されている。

岡崎古墳群での古墳造営は20号墳に始まり、15号、18号と続く、初期の築造エリアである。

15号、20号墳について、正確な規模の把握に至っておらず、今後調査を必要とする。

2 4号墳エリア

4号墳の北側に所在する3号墳を含み、消失墳の周溝4基(16号、17号、21号、22号)が存在している。現在のところ古墳周溝に地下式横穴墓が伴う例のみが確認されている。また、古墳同士が比較的近接して築造されていたことが想定される。

令和元年度、2年度に確認した遺構状の土色変化について、令和5年度に元年度分の再調査を行い古墳周溝・地下式横穴墓の存在を確定させたが、元年度の東側及び2年度分については情報が不足している。

3 地下式横穴墓群エリア

古墳が存在する4号エリア、15号、18号～20号エリアの中間に位置する。単体で構築された地下式横穴墓が群をなしている。このエリアはかつて古墳(盛土塚)が複数存在していたとされるため、消失した古墳(盛土塚)の性格についても検討を行う必要がある。

また、未調査部分も多く、さらに地下式横穴墓、

古墳が発見される可能性がある。

4 無遺構エリア

トレンチ調査の結果により無遺構エリアとした。対象面積に比して調査面積が不足している状況にある。土層断面の観察からは、北側から南側へと黒色土が厚く堆積しており、池田降下軽石面でも北側では現地地表から52cm、南側では121cmを測り、旧地形の傾斜が確認できた。

4号墳エリアの最南端と考えられる21号、22号付近では、池田降下軽石面まで約60cmであり、無遺構エリアと同様の黒色土の堆積があったと考え、古墳時代は現状より地表面がかなり高かったことが想定される。

現状では緩やかな地形だが、古墳や地下式横穴墓を作らなかった理由は地形による制約も関係している可能性がある。

5 判断保留エリア(5号墳・10～14号墳)

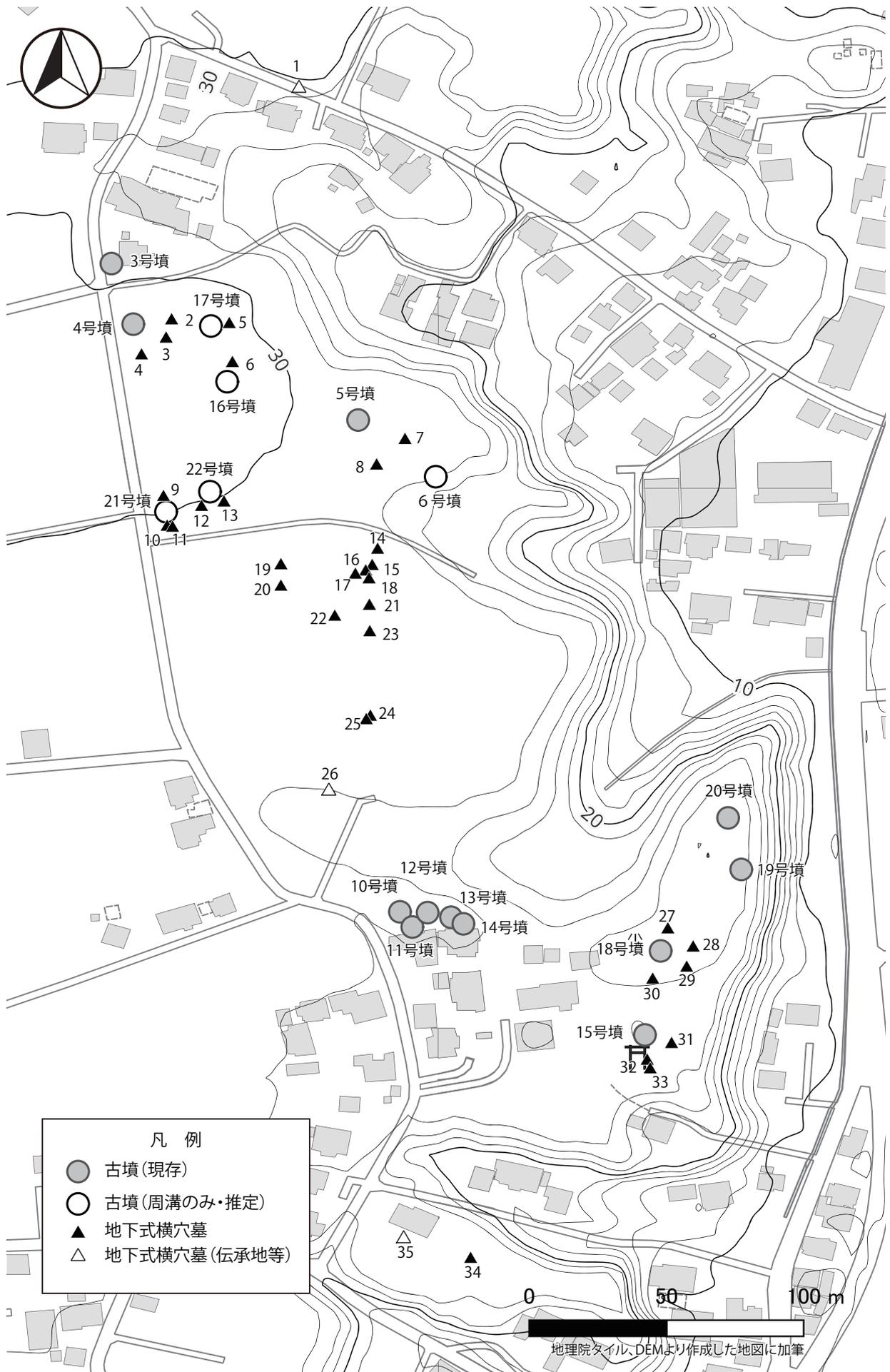
古墳周溝の再発見により古墳の真否確認を試み、調査で周溝は確認できなかったが後世の削平等の影響を想定し、真否についての判断を保留とした。調査結果の精査、調査方法の検討を行い、確認を行う必要がある。

第3項 出土遺物

今期の調査で出土した遺物は、古墳あるいは地下式横穴墓での祭祀に伴うものと考えられる。22号墳の周溝を利用している12号地下式横穴墓の北西部で出土した1～26については、同一周溝内からの出土である。しかし、令和元年度の調査記録に不足や誤りがあり出土状況が不明なため、12号地下式横穴墓に伴うものという確証が得られない。35～42は23号地下式横穴墓(竪坑本体未検出)に伴い、破碎行為が行われた可能性が高い。

須恵器大甕33は16号墳の周溝内である可能性が考えられるが、調査時には周溝の確認ができていない。

古墳や地下式横穴墓における葬送儀礼についての検討を進める必要がある。



第 32 図 古墳及び地下式横穴墓分布図

| 新 番号 | 古墳 周溝等 | 旧・調 査番号 | 調査 年度 | 報告書名 | 発行年 | 副書名 | 備考 |
|---------|-----------|------------|----------|--|------|---------------------|--------|
| 1 | 伝承地 | | | | | | |
| 2 | 4号墳 | 3 | | 岡崎4号墳・ 1号地下式横穴墓 | 1986 | 串良町埋蔵文化財発掘調査報告書(1) | |
| 3 | 4号墳 | 2 | | 岡崎4号墳・ 1号地下式横穴墓 | 1986 | 串良町埋蔵文化財発掘調査報告書(1) | |
| 4 | 4号墳 | 1 | | 岡崎4号墳・ 1号地下式横穴墓 | 1986 | 串良町埋蔵文化財発掘調査報告書(1) | |
| 5 | 17号墳 | 5 | | 岡崎古墳群 | 1990 | 串良町埋蔵文化財発掘調査報告書(3) | |
| 6 | 16号墳 | 4 | | 岡崎古墳群 | 1990 | 串良町埋蔵文化財発掘調査報告書(3) | |
| 7 | | T5-1 | 2022 | 岡崎古墳群2 | 2024 | 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(93) | 本報告書 |
| 8 | | T6-1 | 2022 | 岡崎古墳群2 | 2024 | 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(93) | |
| 9 | 21号墳 | 21-1 | 2023 | 岡崎古墳群2 | 2024 | 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(93) | T1-1 |
| 10 | 21号墳 | 21-2 | 2023 | 岡崎古墳群2 | 2024 | 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(93) | T4-1 |
| 11 | 21号墳 | 21-3 | 2023 | 岡崎古墳群2 | 2024 | 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(93) | T4-2 |
| 12 | 22号墳 | 22-1 | 2023 | 岡崎古墳群2 | 2024 | 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(93) | T6-1 |
| 13 | 22号墳 | 22-2 | 2023 | 岡崎古墳群2 | 2024 | 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(93) | T5-1 |
| 14 | | | 2021 | 岡崎古墳群2 | 2024 | 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(93) | T3-6 |
| 15 | | | 2021 | 岡崎古墳群2 | 2024 | 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(93) | T3-1 |
| 16 | | | 2021 | 岡崎古墳群2 | 2024 | 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(93) | T3-2 |
| 17 | | | 2021 | 岡崎古墳群2 | 2024 | 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(93) | T3-5 |
| 18 | | | 2021 | 岡崎古墳群2 | 2024 | 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(93) | T3-3 |
| 19 | | | 2021 | 岡崎古墳群2 | 2024 | 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(93) | T9-1 |
| 20 | | | 2021 | 岡崎古墳群2 | 2024 | 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(93) | T9-2 |
| 21 | | | 2021 | 岡崎古墳群2 | 2024 | 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(93) | T3-4 |
| 22 | | | 2021 | 岡崎古墳群2 | 2024 | 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(93) | T6-1 |
| 23 | | | 2021 | 岡崎古墳群2 | 2024 | 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(93) | T3-7 |
| 24 | | | 2021 | 岡崎古墳群2 | 2024 | 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(93) | T5-1 |
| 25 | | | 2021 | 岡崎古墳群2 | 2024 | 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(93) | T5-2 |
| 26 | 伝承地 | | | | | | |
| 27 | 18号墳 | 18-1 | | 大隅串良 岡崎古墳群の研究 | 2008 | 鹿児島大学総合研究博物館 | |
| 28 | 18号墳 | 18-2 | | 大隅串良 岡崎古墳群の研究 | 2008 | 鹿児島大学総合研究博物館 | |
| 29 | 18号墳 | 18-3 | | 大隅串良 岡崎古墳群の研究 | 2008 | 鹿児島大学総合研究博物館 | |
| 30 | 18号墳 | 18-4 | | 大隅串良 岡崎古墳群の研究 | 2008 | 鹿児島大学総合研究博物館 | 存在可能性 |
| 31 | 15号墳 | 15-2 | | 岡崎古墳群・上小原古墳群・ 供養の上古墳群墳丘測量 図・岡崎15号墳 | 2007 | 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(81) | |
| 32 | 15号墳 | 15-3 | | 岡崎古墳群・上小原古墳群・ 供養の上古墳群墳丘測量 図・岡崎15号墳 | 2007 | 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(81) | |
| 33 | 15号墳 | 15-1 | | 岡崎古墳群・上小原古墳群・ 供養の上古墳群墳丘測量 図・岡崎15号墳 | 2007 | 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(81) | |
| 34 | 北田の上 | 2 | | | | | |
| 35 | 伝承地 | | | | | | 北田の上1号 |

第7表 地下式横穴墓一覧



第33図 4号墳周辺古墳位置及び規模

第4項 遺跡の本質的価値

岡崎古墳群の価値として、まず、墳丘を持つ古墳に周溝を利用した地下式横穴墓が存在する例がある。また、岡崎古墳群の造営が唐仁古墳群や横瀬古墳の築造期に並行しており、この地域の盟主には大型の前方後円墳があって岡崎古墳群がその下位の首長墳として位置づけられる。唐仁古墳群と橋本先生の報告書の中でも、唐仁古墳群や横瀬古墳付近には地下式横穴墓が存在しないが、古墳と地下式横穴墓が岡崎古墳群には存在し、古墳と地下式横穴墓共存化が下位の首長層のもとで起こったと考えられると指摘されている。さらに、岡崎古墳群から出土した広域流通材は中位首長のみならず中下位首長層まで供給されており、肝付平野周辺においても古墳時代中期には列島規模の社会交流圏としてつながったことが読み取れる。

これらの調査成果や価値付けを踏まえ、唐仁・塚崎・横瀬といった大隅の古墳群を一体として理解することで示すことができる価値があるという認識のもと、既指定古墳、古墳群と一体となった価値付けを行い、保護を図っていくという軸を設定した。つまり、既指定古墳、古墳群を含めた大隅地域の古墳時代理解のためには、岡崎古墳群が欠かせない存在であることの証明を行うということに他ならない。

発掘調査を行い、域内に2種の地下式横穴墓の存在形態があることが明らかとなったことで、岡崎古墳群の本質的価値を高めるプラスの要素となったといえる。地下式横穴墓は調査方法などに課題を抱えているものの、古墳と地下式横穴墓がセットになること、群として存在するエリアがあることは、古墳群としての価値に大きく貢献するものとする。しかし、現状では本質的価値として明確に説明することができず、今後も引き続き検討する必要がある。

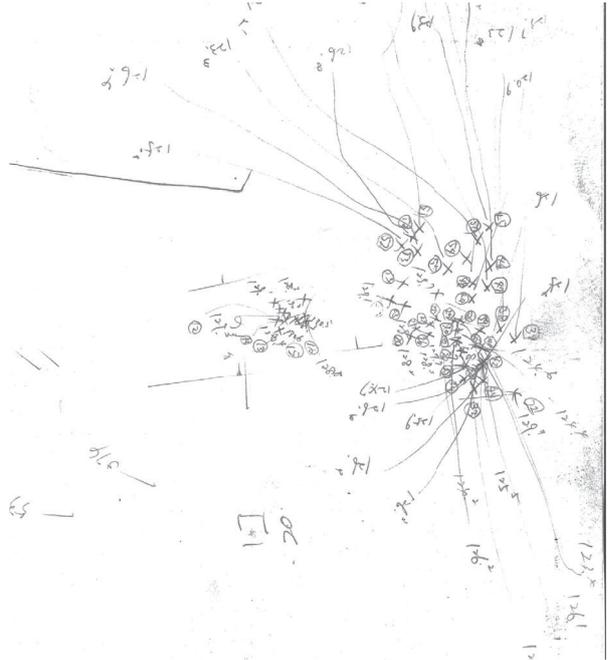
第3節 反省点

第1項 基本的情報の不足

岡崎古墳群が国指定を目指すにあたって、基本的情報の未整理や不足が多い状態での事業開始となってしまった。県文化財課・文化庁とより一層の連携が必要だった。

第2項 調査精度の不足

保存を目的とした調査とはいえ、遺構規模や性格を明確にせず調査を終えていたり、以下のような図面だけで調査位置の復元ができない記録方法がとられていたりした。また、トレンチ調査での調査面積の不足や全体像の把握困難、能力・経験不足に起因する誤判断も起こっている。これらは本市の体制や職員の資質不足が原因である。今後発掘調査を検討する場合は、県文化財課などの協力を仰ぎながら進める必要がある。

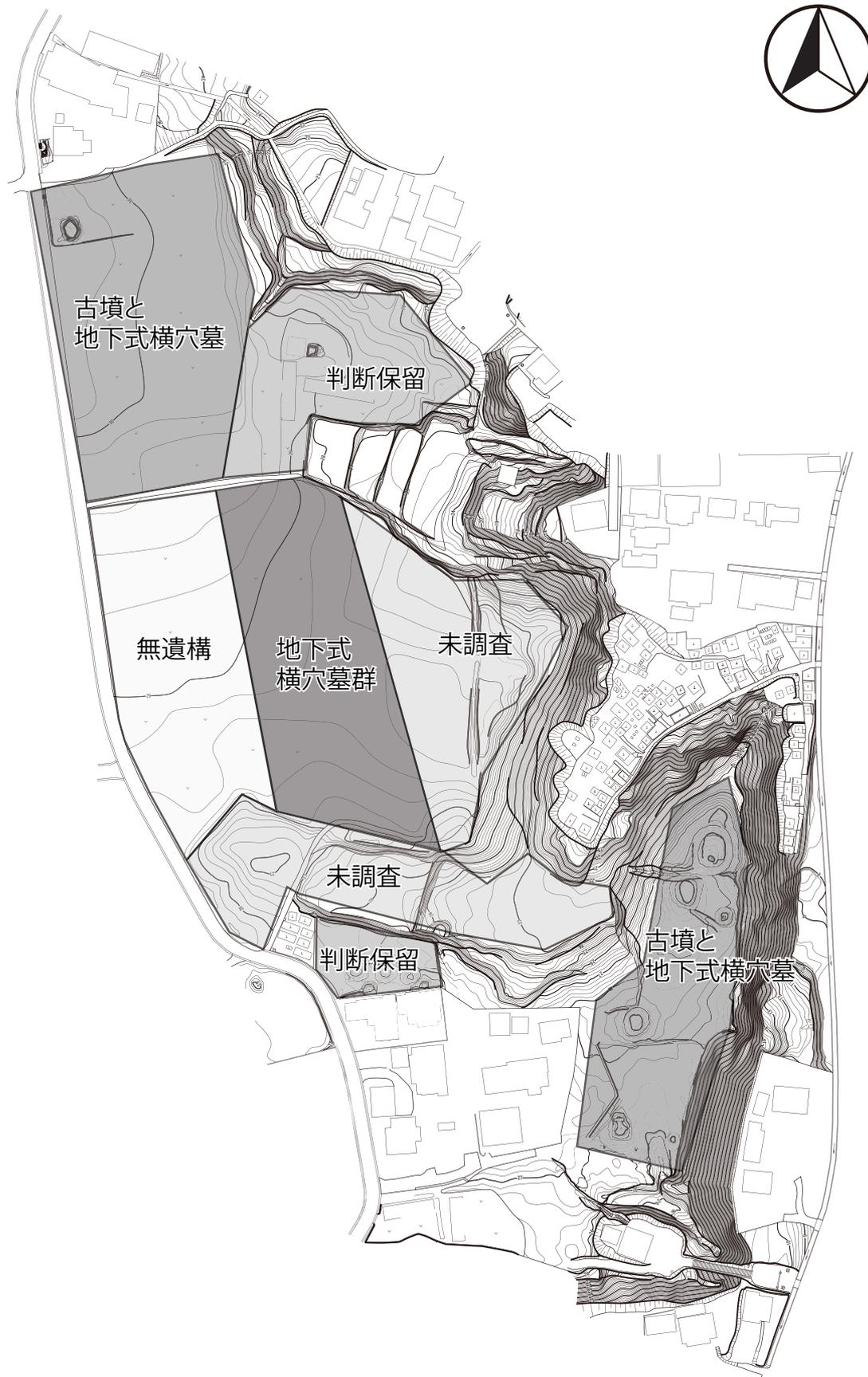


第3項 検討委員会の初年度不設置

新型コロナウイルスの蔓延があったとはいえ、少なくとも委員への委嘱は可能だったと考えられる。会議についても、ウェブ会議等の代替法を選択すべきであった。

第4項 周知活動について

検討委員会において、『国指定を目指している遺跡でありながら知名度が低い。』と複数回にわたり指導・助言があった。このことは事実であり、本市の努力不足にままならない。市民向けの体験活動、広報誌での特集などにより周知を行ってはいるが、市外・県内・国内へのPRには直結していない。これから検討し、できるだけ多くの人々に知っていただく活動が必要である。



第 34 図 岡崎古墳群ゾーニング案